

192号

'94 女たちは……



宮澤賢治

女・家族・性

——フェミニズムの視点から—— 鶴岡 瑛

'94

私は想う

奥山えみ子 ほか

新年エール交換

女から女たちへ

連載

看護婦・光と影 黒木喜久子(2)

増田れい子



目次

巻頭言 勇気とやさしさ 1

宮澤賢治 女・家族・性

——フェミニズムの視点から—— 鶴岡 瑛 2

'94——私は想う 奥山えみ子ほか 31

めじゃーなりすとのめ 93年の大事 西村康子 46

気になる英語 プロチョイス・プロライフ 奥川 睦 48

TOPICS 障害者情報ネットワーク発足ほか 50

意見／異見 190号「政治改革」について意見を 谷 和美 52

黒人女性監督の映画を紹介したい 伊地知徹生 54

看護婦 光と影11 黒木喜久子さん(2) 増田れい子 56

新年エール交換——女から女たちへ 63

あこらのあこら 93年のメッセージから 73

勇氣とやさしさ

新しい年が明けました。

すべてが新しくなりそうな期待を　つい抱きたくなりますが、底知れぬ“混迷”を明るい展望に向けての“激動”に変えるためには、フランス革命と変わらないくらいのエネルギーが、多分必要でしょう。

巨大な権力の重層構造を前に、ことしもまた、ひとりひとりの己れが試されているという思いを深くします。

その己れが生きる基盤としての家族、家庭もまた揺らいでいます。

揺らぎの中に新しい視界が見えるのか見えないのか――。

鶴岡　瑛さんの宮澤賢治論に見え隠れする　古くて新しい家族像は、冷害に政治公害が結びついた日本のコメ問題とも深くかわる。女、そして家族の問題の根深さを、改めて心にひびかせます。

くじけないほうが難しい“今”ですが、だからこそ、ほんとうのやさしさと勇氣を持ち続けたいと、切に思います。

宮澤賢治 女・家族・性

——フェミニズムの視点から——

鶴岡 瑛

〈はじめに〉

宮澤賢治に関して、没後六十年を経た今なお、現在進行形で多くの著作が生みだされている。賢治ほど専門の文学者はもとより、畑違いの科学者、素人をも含む多くの研究者・愛読者を持つ文学者は、日本には他にないのではなからうか。それは賢治文学の引力の大きさを物語ると同時に、それが読む者の関心や生活体験に応じたさまざまな読み方を可能にするような、広さと深さを持ったものであることの証しでもあらう。

しかしその多様な賢治研究の中に、未だある一つの方向——分野が欠けているように、私には思えてならない。それはフェミニズムの目を通した、旧憲法下の家族制度の中で生きた賢治と家族の關係の解明であり、賢治文学解読の新たな可能性である。

生前文学者としては無名に近かった賢治を広く一般に紹介し、論評し、資料、伝記を整理、保存するなどの大きな功績を果たした人々は、しかし男性中心の視点から、人間賢治の形成に大きな部分を担った、家族、ことに女性との關係をなおざりにしてきたのではないかと思われる。そのことが賢治の作品を読む上で、読みを浅いものにしたことはなかったらうか。

そんなはずはない。賢治と親密な兄妹愛で結ばれた妹トシは、あの高名な挽歌群の主人公として、常に研究者の興味の対象となってきたではないか、と反論される向きもあるかも知れない。しかしそれは賢治の妹、あの挽歌群の中に可憐で哀切な言葉を残して若死したヒロインとしての側面にだけ興味が向けられていて、彼女が本当にはどういう女性で、どのような志向を持ち、あまりにも短い生をどのように生きたかはほとんど考えられてこなかったように思う。彼女についての資料はあまりにも少なく、ほとんど宮澤家側から提供されたものに限られる。それらの資料は挽歌群に描かれた、生への執着の薄い、はかなげな女性像を補強するものではない。そこには彼女の肉声が響いてこない。

たとえば彼女は二十四歳で亡くなったのだが、当時は十六、七で嫁入りする例も多かったという。母堂は「お嫁さんにしないで死なせたのがくやしい」と嘆かれたそうだが、彼女を喪つて悲嘆にくれた恋人なり、人知れず泣いた男性はいなかったろうか。彼女は結婚にどんな夢を持ち、また生前どんな縁談があつたのだろうか。こうした俗な想像は、これまでの彼女の清純イメージを傷つけるものだろうか。

大正二年二月の賢治の父宛て書簡によつて、東京の女子大卒業後帰宅した彼女の結婚について賢治が意見を求められたことが知られる。賢治は、彼女の健康を理由に再考するようにと父に答えている。これがどの程度具体化した話だったのかも不明だし、他に彼女に縁談があつたという資料はないようである。体が弱くて在学中にも入院した経歴はハンディとはなつたろうが、宮澤家のような財産家で、美人でもあり性質もよく、高い学歴を持つ女性にまつたく縁談がなかつたとしたら不思議ではないだろうか。それともその学歴が高すぎるということが、逆に彼女を縁遠くしたのだろうか。

三つ違いの妹シゲは、彼女の病中に先に嫁いでいる。妹に先を越されて彼女に寂寥感はなかつたろう

か。それとも彼女はそんな感情を超越していたのだろうか。先の母堂の言葉は紹介されても、彼女自身の気持ちは伝えられていない。賢治もまたそれをどう思っていたろうかを考えるのも興味深い。後年に賢治は末妹クニのために婿を世話している。誰よりも大事なトシの結婚について考えたことがなかったとは思にくい。

しかし当時の花巻のような狭い町で、彼女にふさわしい配偶者を見いだすのは困難だったのではなからうか。結婚が個人と個人の結び付きというより、家の〈嫁〉選びであつた時代のことである。健康に弱点のある彼女が、彼女の母にみられるような、ただひたすらな働き手としての家婦――まず家の嫁、主婦、母、そして最後に妻――になりえたらうか。また当時の女性としては最高の教育を受けた彼女自身、そして家族が、そうした結婚を望ましいものと考えたらうか。子女の教育に周到な父政次郎氏が、年頃の娘をはるばると東京まで遊学に出すについて、結婚や将来について考慮しなかつたとは考えにくいのである。

多分彼女は、病気で夭折しなかつたとしても、結婚はしなかつたのではないか、と思う。常々「人のためになりたい、郷土のために働きたい」と言っていた彼女のことである。彼女のような境遇の、高学歴の女性たちがそうしたように、独身の女学校教師として社会に貢献する道を選んだ可能性が高い。おそらくそれはまた賢治の望むところであつたのではないかという気がする。となれば賢治の独身主義について、その点から考えてみる必要がある。

「永訣の朝」をはじめとする挽歌群を読むと、死によつて〈信を同じくするたつた一人のみちづれ〉トシに置きざりにされた賢治の愁嘆、狼狽ぶりがひしひしと伝わってくる。また身近な人たちの伝える賢治の悲しみよう、取り乱し方は激情と呼ぶにふさわしく、あまりに生々しくて目を背けたくなるものが

ある。そのトシが余儀なくであれ、自分から選んだものであるにしろ、独身でいるのに、賢治だけが安閑と嫁を取り子をなして（自分ひとりしあわせ）にひたるとは考えにくい。なにしろ「私は一人一人について特別な愛というものは持ちませんし持ちたくありません。さういふ愛を持つものは結局じぶんの子どもだけが大切といふ、当たり前のことになりますから」という賢治である。

二人の間に独身主義の誓いのようなものがあつたと推測しても無理ではないだろう。おそらくその時期も、トシが花巻高等女学校、賢治が花巻農学校へ揃つて奉職した頃と考えてよいのではないか。彼らにそうした決心をさせた要因の一つとしては、兄妹に共通する「健康への不安」があつたであろうことは否めない。しかし賢治の真実の動機は、もつと深いところに隠されているように思う。

(一)

一般に賢治の禁欲は宗教からくるものと考えられている。例えば「宮澤賢治 その愛と性」の著者儀府成一氏は、次のように言われる。

「（晩年に翻心するまでの）彼は、法華經の信者としてのきびしい戒律をわが身に課しつつ、がんこに童貞を通してきた。法を守り、わが身を破らないためには、女性はやの愛の對象などでは絶対なく、悪魔ともみなさなければならぬ恐ろしい存在だつたのだ。」

「彼も日蓮にはしらなかつたら、あれほど性の金縛りにあわずにすみ、もつとのびのびと文学活動ができ、小説も書けたのではないか。賢治は晩年になると、そうした自分の禁欲生活のあやまちを認め、結婚してもよいと洩らすようになる。」

日蓮にはしらなかったらとか、法華經の戒律云々には首を傾げざるをえない。私は浄土真宗の信者として、法華經には不案内だが、確かめえたところでは、日蓮は末法の世で戒律を厳守することは困難、との立場を取り、独身、禁欲を奨めたことはなかった由であるし、大乘仏教の五戒、十戒では、邪淫は戒められても、結婚が禁じられているわけではない。安易に法華經信仰のためとくるのはどんなものだろう。

賢治およびその家族と面識のある儀府氏はまた

「賢治ほど富裕な家庭にうまれて、何故あれほど自分の将来のこと、職業上のことでアクセク動揺しなければならなかったのか、これも私には少々不思議な気がしてならない。家業を継ぐにせよ拒むにせよ、県内有数の豪家といわれる宮澤家の長子である。裁量も人に秀れている。人ひとり三年や五年座食したところで、宮澤家の財力をもつてしたら痛くもかゆくもないにきまつている。ピクピクせずにもつとどつしりと構えて、天下何するものぞと悠々筆をとつてもらいたかった」と言われる。

しかし賢治は家業を継ぐことと一緒に、長男としての義務、妻をめぐり家の跡継ぎを残すことも拒否しているのである。

大正七年十月の保阪嘉内宛書簡で賢治は次のように言う。「私は長男で居ながら家を持つて行くのが嫌で又その才能がないのです。——中略——その時迄には私は弟でも妹でもちゃんと家を自分から進んで守つて行く人にたのんで私は許して貰はうと思ふのです」

男子、長子相続を要めとする家族制度の時代に、へ家を持つて行くのが嫌へ弟でも妹でも……と自然に出るのが、時代の制約を苦もなくまたぎ越してしまう賢治の真骨頂ではなからうか。しかしこうした

輕さは父の側からみれば、世間しらずの寢言とも、許しがたい無責任とも思えたことであろう。

宗教と禁欲、独身を結ぶ線上で考えたいのが、時折噴出する賢治の〈出家〉願望である。たとえば、結局国柱会に受け入れられず挫折してしまつたが、賢治は真剣に出家し僧侶として活動するつもりで家出したのではないかと私は考える。またその出家願望も、單純に後顧の憂いをなくして宗教活動に挺身したいというものだけとも考えにくい。なぜなら先に見たように、賢治の家に對する嫌悪や反発は、單に質・古着業という家業に對するものだけでなく、〈家〉の跡取りという束縛に向けられているように思えるからである。單に家業の転換ということなら、政次郎も早い時点で認めているのである。

出家して宗教活動に入れば、自然に長男という立場や家業から自由になれるし、禁欲―独身主義についても納得が得られやすいのである。だからまた家の継統、先祖の祭祀を重視する立場では、安閑と賢治の望みにまかせるわけにはいかなかつたろう。もし賢治に導かれて父母が改宗すれば、次に賢治が法華經広宣のため献身したいと言いだしても、反對する根拠がなくなる。一步をゆずれば、次に賢治がどこまで羽ばたいてしまふかわからぬ、という不安が父の側にはあつただろう。表面的には宗教を巡つてとみえる賢治と父親の争いは、父母の改宗と家の後嗣問題、賢治の結婚拒否・独身願望とが複雑に絡み合つたものであつたと思われるのである。

この父子の確執については、網沢満昭氏がその著書「宮澤賢治 縄文の記憶」で、〈賢治を去勢しようとする父〉と〈父に闘いを挑む賢治〉と図式化しているのが興味深い。

氏はまた「彼は精神の上でどうか、宗教上の理由で宮澤家を一応離脱した。もはや宮澤家の長男として異性を受け入れ、子孫を残すということをしてはならぬという強力な自制があつたのではなからうか。彼が女性に関心を示さなかつたなどというのは大きなまちがいで、彼は火のごとく燃える初恋も経

験している。ところが「性欲の乱費は自殺」であり、そんなことをしていると、いい仕事はできないと
いきるのである。彼の性を禁じる行為はその分いろいろな知覚表象を持ち、いろいろな形となつて創
作の道へつながつていったのであらう」と言われる。

しかし禁欲が創作を利用するから、というのは動機としてはいかにも弱いのではないか。それより私は、
賢治の独身主義は宗教的な禁欲の結果でなく、結婚の拒否が先にあつたと結論づけたいのである。宗教
上の戒律、道徳を挙げるまでもなく、彼の性格からして、それは全面的な禁欲を彼に強いたことであろ
う。そして結婚を拒否したことによつて、彼の伴侶を求める願望はより強くトシへ向かわざるを得なく
なつたのではないだろうか。そのトシは彼を残して早世した。もしトシが健康で教諭の職を続けていた
ら、彼も農学校を退職して羅須地人協会の無謀な、自棄的な企てに飛び込むようなことにはならなかつ
たのではないかと想像されるのである。

次に作品を通して賢治の結婚拒否の真因、彼の家族観を探つてみよう。

(二)

賢治の童話を読んでいると、賢治とトシはどういう子供時代を過ごしたのだらう、という疑問が度々
浮かんてくる。それほど彼の童話には、父母の両方が欠けていたり、父の不在、母が病臥中などの変則
家庭が多いのである。

たとえば、飢餓で父母を失う「グスコープドリの伝記」のブドリとネリ。「黄いろのトマト」のバムベ
ルとネリ。この物語には破綻があつて、あるところでは「バムベルとネリは毎日お父さんやお母さんた

ちの働くそばで遊んでいたよ」と語られるのだが、他ではへおとなはすこしもそこあたりに居なかった。なぜならパムペルとネリの兄妹の二人はたつたふたりだけでずいぶん愉快にくらしていたから」と言われる。本当に父母がいたとしても、二人だけで自足している兄妹に照明が当たって、父母の姿は背後の薄暗がりに没している感がある。

「手紙」のチュンセとポーセには〈おつかさん〉がいるのはたしかだが、父の方は所在不明である。「双子の星」に登場する、その名もチュンセとポーセという水晶の宮に住む二人の童子には、〈天の眷族〉の〈家長〉を思わせる〈天の王様〉がいるきりである。

「銀河鉄道の夜」では、主人公ジョバンニの父は不在で、長期の漁獵に出ているのか、何かのところが入獄中なのか、謎のままである。母は病人であり、姉は母親との会話の中にチラリと姿を見せるだけである。友人カンパネルラの母の生死についても、いろいろ論争があつて決め手に欠けるが、多分彼らは父子家庭だと思われる。そのためにその一人子を失った父の悲しみを押し殺した毅然とした姿が余計印象的であるのだが。

これらよりは年上だが、「ボラーノの広場」のロザーロとファゼーロも、互いの他に頼りになる身内を持たない無力な姉弟である。

なぜ父母の存在感がこのように薄いのだろうか。この父母の影の薄さは、賢治とトシの、どのような現実、また心の深奥にあるものを反映しているのだろうか。いま少し賢治の家族の中に踏み込んでみよう。

一般に父政次郎に関しては、母イチの〈慈母〉と対比して〈賢父・嚴父〉の評が定着しているが、厳しい半面、愛情過多あるいは干渉過多というべき面があつたのではないかと思われる。子供にとつて影

の薄い存在でないことはたしかである。

年譜（堀尾青史「宮澤賢治伝」）によれば政次郎は明治七年の生まれである。早くから家業の質・古着商に従事し、十代半ばにはもう父の代理を務めたということに、その素質の優秀さがうかがえる。二十一歳で父から家業をまかされ、同族の宮澤イチを娶り、翌年には賢治を、さらに四子を儲けている。勤勉着実に家業を繁栄させ、株投資などで財産をふやすなど理財の才にも恵まれていた。町会議員を四期務め、学務委員、民政委員、小作調停委員などを務め、晩年には藍綬褒章を受けている。経済的な成功に、世間的な名誉も兼ね備えたまさに〈成功者〉の生涯である。

しかし、政次郎はまた篤信の浄土真宗信者であつて、二十代ですでに菩提寺安浄寺の檀家総代を務めている。また知己と共に花巻仏教会、慈光婦人会などを組織し、度々中央から講師を呼んで講習会などを催している。その際賢治も侍童を務めたりして、そうした環境が後年賢治が仏教に熱中してゆく下地を作つたといえよう。膨大な仏教書を所有し読破していたといわれるから、賢治の吹っ掛ける宗論を受けて立つ素地は十分にあつたろう。商家の跡取りとして早くから家業に従事したという経歴から、高等教育を受ける機会に恵まれなかつたことが知られるが、知的関心も深く子弟の教育にも熱心であつたという。どうみても古い時代の田舎町の商人の水準を、はるかに抜け出た素質を持つ人であつたと思われるだけに、それなりの自負や、自身の本当の活躍の場を得ていないという不満があつても不思議はないと思われるのである。

そうしたものをうかがわせる挿話に、〈自分が仏教を知らなかつたら、三井、三菱程度にはなつていたらう〉という彼自身の談話がある。どういう雰囲気の中での発言かはわからないが、花巻という一地方の成功者にすぎぬ者が、自分を日本の三井、三菱と比肩するとはあまりな広言と思われるのだが。これ

は政次郎の自負の大きさを物語ると共に、彼の内面の不足感を明かすものとして注目していいのではないだろうか。

これらを頭に置いて、さらに賢治と父の問題を見ていきたい。盛岡中学時代の賢治が、小遣いの収支を実に几帳面に手紙で報告させられていること、夏休みにも家に帰るに及ばずといわれ、余分な金銭を持たされぬ賢治がやむなくワラジ履きで歩いて家まで帰った挿話などからは、賢治に対する父の嫉の並でないことが知れる。前出の綱沢氏の「賢治を去勢する父」と「父親に対し闘いを挑む賢治」との構図に同感したくなる。憶測をたくましくすれば、賢治をして父に去勢されまいとすれば、父の上に出なければならぬと覚悟させるほどの圧力が、父から賢治に掛かっていたのではないだろうか。

他の子供、ことに娘に対して慈愛に満ち思慮深い父であったが、賢治に対しては分別の域を越えて、何とかして一かどの人物にしないでおかない、といった風な「愛のムチ」を振るつたのではないだろうかと思われる。それは古い時代の家長―父親の「跡取り」に対する愛情の裏返しの際しさと、賢治が父の期待するだけの素質を持つ子であったことその他に、父自身の問題、先に見たような不充足感のせいもあつたのではなからうかと思われる。

息子の賢治は、もともと定まつた軌道というもののさえ持たないような脱線の名人だが、父の成功者としての経歴は先に見たようなものである。父の人生はこの環境と性格的なものが相まって、常に全力投球、四角四面の息苦しいものであつたのではなかつたらうか。

賢治も宮澤家の長男として生まれたことで、父と同じような人生を歩むように運命づけられた。だが、

幸か不幸か賢治は父と違つて商才に恵まれず、しかし別種の大きな才能をもつて生まれついた。父は、ともすれば踏み固められた轍を外れようとする息子を、口やかましく訓戒し、容赦なく叱責し、しかもひそかに、地道な商人としての自身のなし得なかつた「目覚ましいこと」を期待していたのではなかつたらうかと思われる。この間の経緯を解き明かすものとして、妹シゲの次のような談話がある。

「賢治さんもお父さんも両頭の蛇だと思います。宗教の方なら、賢治に高僧になつてもらひたかつたし、学問の方なら博士になつてほしかつたのでしよう。お父さんも、宗教家であると同時に大事業家になつたところもありました。」（森莊巳池「宮澤賢治の肖像」）

いつたいに人間に関する細かい事柄に興味を惹かれるのは、男性より女性のほうではなかつたか。ことに厳しい家族制度の下では、女性には狭い範囲の中で生きること強いられ、自分を主張せず、ひたすら他に合わせる受け身の生き方を強いられてきた。だからある場合、女性は人間観察の大家になつても不思議はない。

シゲはトシに次ぐ五歳年下の妹で、学業成績も優秀であつたという。この談話からも曇りのない伶俐な目とさわやかな人柄を感じる。〈両頭の蛇〉とはよくもいつたり。賢治と政次郎の、すぐれた素質を共有しながら、それぞれに個性もあり、頑固でもある父子の、また旧家族制度下の戸主と長男の、保護と束縛の関係をズバリと言ひ表していると思える。もし賢治が普通に家業を継ぎ、当たり前前に嫁をとつて子を生んでいたら、賢治もまた子に対し同じようなことをせざるを得なかつたのではないか。賢治は独身を貫くことでそうした家長になるのを拒否したのだ、と私は感じる。

父が賢治に、賢治のねばりと抵抗もあつてのことだが、中学進学、さらに高等農林入学を許したこと、

農学校教師の職にあつた時も、それを擲つての羅須地人協会時代も、実際には実家の援助によつて生活することを許した寛大さは、(自身はそうした機会に恵まれなかつた)父からの恩義として賢治に重くのし掛かつていたはずだ。なんといつても賢治が生涯さまざまに試行錯誤を繰り返すことができたのも、父の財力とそうした黙認のおかげといえるのだから。

しかし父は息子に、自分の羽交いの下から出ることだけは許さなかつた。賢治がどのように反抗しあがいてみても、父は決して突き放すことなく、じつとそのあがきの一部始終を見守つていた感がある。愛情の深さと同時にその執拗さは、時として不思議に感じられるほどである。父の側に息子を手放すことや、自分が取り残される恐怖があつたのではないかと思いたくなる。息子の才能がどのようなものか、それが世間に通用するものかどうか、それを見届けるまでは氏も息子と共に懊悩したのではなからうか。文学者、教師、農業技師のいずれとしても、賢治は成功者と言いがたく、その職業で一家をなすに至らなかつたから、彼の生涯はついに持ち重りのする父との二人三脚に終始するものとなつた。

(三)

ここで大正五年の作品「家長制度(及びその先駆形としての「丹藤川」)」を通して、賢治が家族制度というものをどう見ていたかを探つてみたい。

「家長制度」は四百字詰二枚に納まる短さで「丹藤川」はさらに短く、改作に際して表現上の異同は認められるものの、内容的にはさほどの変更はない。まず「家長制度」を全文紹介し、その関連で大正七年作と推定される短編「泉ある家」も見てみよう。

「家長制度」

火皿は油煙をふりみだし、炉の向ふにはこの主人が、大黒柱を二きれみじかく切つて投げたといふうにどつしりがたりと膝をそろへて座っている。

その息子らがさつき音なく外の闇から歸つて来た。肩はひろくけらを着て、汗ですつかり寒天みたいに黒びかりする四匹か五匹の巨きな馬をがらんとくらしい厩のなかへ引いて入れ、なにかいろいろまじなひみたいなおことをしたのち土間でこつそり飯をたべ、そのまゝころころ藁のなかだか草のなかだか厩のちかくに寝てしまつたのだ。

もし私が何かちがつたことでも云つたら、そのむすこらのどの一人でも、すぐに私をかた手でおもてのくらやみに、連れ出すことはわけなさうだ。それがだまつてねむっている。たぶんねむっているらしい。

火皿が油煙を揚げるその下で、一人の女が何かしきりにこしらへている。酒呑童子に連れて来られて洗濯などをさせられているそんなたちではたらいっている。どうも私の食事の支度をしているらしい。それならさつきもことわつたのだ。

いきなりガタリと音がする。重い陶器の皿などがすべつて床にあたつたらしい。

主人がだまつて、立つてそつちへあるいて行つた。

三秒ばかりしんとする。

主人はもとの座へ歸つてどしりと座る。

どうも女はぶたれたらしい。

音もさせずに撲つたのだな。その証拠には土間がまるきり死人のやうに寂かだし、主人のめだまは古

びた黄金の銭のやうだし、わたしはまつたく身も世もない。

(ちくま文庫・宮澤賢治全集8による)

これについては従来〈習作〉〈直線的なスケッチ〉とか〈内容にひき較べて「家長制度」という標題は小ささが巨きすぎる〉というような評を受けている。たしかに短いし、筋らしい筋があるわけでもない。しかし私はこれを軽く読みすことに異議がある。ここには生々しい暴力の描写はないし、なき声も聞こえてこないが、日常的、制度的とでも名付けたいような暴力が描かれているからである。またこれを〈家父長の悠揚迫らざる姿〉を描いたものだとか、〈この農家の主人を描く筆つきに、憎悪ならぬ「豪快さ」「畏敬の念」さえ読み取れる〉という見方にも賛同できない。

それでは賢治が一生掛けて立ち向かった〈ひば垣や風の暗黙のあひだ／主義とも云わず思想とも云わず／ただ行なわれる巨きなもの〉を正しく理解し、〈結局おれではだめなのかなあ〉という嘆きを共にすることが出来るだろうか。批評といわぬまでも、趣味的に読むという営為であつても、作者の世界を全体的に理解することが必要であらう。

私が最初にこれを読んだとき、もつとも印象的であつたのは、撲るもの―撲られる女―死人のように息をつめて気配を読んでいる土間の人間たちによる―無言劇の息の合い方である。これは、こうしたあるいはもつと陰惨な場面が、繰り返し行なわれてきたということではないだろうか。

だがいったい、この女は撲られなければならないようなどんな〈悪いこと〉をしたというのだろうか。前掲の評者たちはそのことを考えてみたろうか。

「家長制度」ではそれは、〈重い陶器の皿などがすべて床にあたつた〉と描かれ、「丹藤川」では〈ガタリと音がして皿が一枚床板の上に落ちた〉と描かれるだけである。別に皿が割れたというような損害

を伴うものではなさそうだ。しかし無言で身を縮めている女にも、土間で息をひそめている人間たちにも、あらがいの姿勢は見られない。

それにしても、この女はこの家長の何に当たるのだろうか。他に「家刀自」というような年配の女はいないようだから、この女が一家の主婦には違いない。しかし「酒呑童子に連れて来られて」以下の描写からは、頼りなげな若い女の印象を受ける。主人の妻だとしても、成人した息子たちの母とは思いいから、若い後妻だろうか。何かしよんぼりした印象から、この女をこの家の娘とは考えにくい。

私は「土間がまるきり死人のように」の、強い緊張感から、これを息子の妻、土間の誰かの妻と推測する。夫はひそかに土間から氣遣つているし、弟たちも、兄と共に息をこらしていると読めるのである。だが、そうなるとまたまたわからないことが出てくる。これが息子の妻だとすれば、彼らの夫婦としての生活はどうなっているのだろうか。こうして土間で起居するのが彼らの日常なのだろうか、このことについて少し考えてみたい。

大体外が暗闇になるまで馬を酷使するというようなことが、一年中あるわけではないだろう。多分、これは田起こし畑起こしなどの農繁期の情景と思われる。また息子たちが一年中土間で生活しているとか、客があれば息子たちがいつも土間で寝る、ということも考えにくい。これも農事優先で、寸暇もおしい時期だからあり得る光景と読みたい。

私は作者が息子らについて、へなにかいろいろまじなひみたいなきことをしたのち土間でこつそり飯をたべ、そのままころころ藁のなかだか草のなかだかうまやのちかくに寝てしまったのだ。」とわざわざ書いていることに意味があると思うのである。

ここで考えたいのが、日本の家族制度の下での家族のあり方、ことに性を紐帯とする夫婦の関係であ

る。大家族制度の本来本元である中国では、男子は長男であれ次、三男であれ、均分の財産相続に預かるから、次、三男も原則として結婚することができる。同じ家に同居はしても、家屋は共有の財産であり、夫婦は彼等の房に暮らす。

しかし、単一家族がそのまま拡大されたような日本型の場合、家も財布も家長のものであり、一人前の息子も妻も〈子として〉家長の統制に服さねばならない。寝室の独立さえ十分に保証されない中では、個人の私生活は極力制限される。極論すれば、家に跡継ぎを残すための、生殖以外の性に関する事柄は抑制されることが望ましい。若い夫の妻に対する労りも傍目をひきやすい。だから土間の夫もそ知らぬふりをするしかないであろう。

(四)

政次郎は「家長制度」に描かれたような、腕力で家族を統御するような家長でないことは無論だが、昔流の家長の常として相当に厳しく口やかましいタイプであつたと見られる。たとえばイチの回想にも、羅須地人協会時代の賈治の粗食を見かねて、末娘のクニに食べ物を持たせてやつても、賈治は受け取らない。泣いて帰つたクニと一緒に、彼女も泣いたそうだが、〈そんなところをお父さんに見つかつたりしたら、涙どころか目から火がでるほどきびしくられる（叱られる）ので〉二人して声を立てないように、台所の隅で泣いたと語られる。

イチはどの伝記でもその「やさしさ、性格の円満さ」をたたえられている。しかし、大家族の〈嫁〉として彼女がした苦勞が、どのようなかあまり語られていない。

彼女の舅に当たる、政次郎の父喜助は、酒ものまねば冗談もいわず（石に金具を着せた）と形容されるほどの堅物であつたという。彼を「なめとこ山の熊」に出てくる因業な荒物屋の主人のモデルとする見方もある。三男坊で分家の際、兄から分け与えられたわずかな元手から、一代で宮澤商店の基礎を築き上げたという経歴からもそうした印象が強い。

後に喜助には孫に当たるトシが、東京遊学中、巻紙二メートル半に及ぶ手紙で祖父をいさめたことがある。年若い孫娘の身で祖父に説教したということで、トシを批判する向きもある。この時喜助は中風にかかつており、世話するイチも過勞からくる神経痛で寝込んだことでもあり、母の苦勞を見るに見かねて、ということではなかつたらうか。

賢治も後に父宛書簡で、「亡祖父様いづれに御出でなされ様やも明ならず」と、暗に「地獄行き」を心配しているくらいで、この祖父については何らかの問題があつたと見るべきだろう。ちなみに喜助が隠居して政次郎に家督をゆずつたのは大正四年、政次郎が家業を引き継いでから実に二十年後のことである。この父と、勤勉で仏教に造詣の深い息子とのギャップに、これまでのどの伝記作者も、注意を向けた形跡がないのが残念である。

イチの回想でも、喜助は口の善つた人であつて、嫁いだばかりのイチは舅の嗜好に合うような魚料理の仕方が身についておらず「これではとてもつとまらない」と、しばらく実家に戻つて毎日魚料理の修得にはげんだという挿話が語られている。彼女の実家は音に聞こえた財産家であるが、その割にはつましい生活ぶりであつたのか、喜助の要求が並はずれたものであつたのだろうか。それにしても若嫁が魚料理に慣れていないからといつても、教わりながら婚家の味を身に付けていけばすむことではないのか。そうした難しい舅に加え、姑キンも長いこと中風を病んで寝込んでおり、大正二年に姑、大正六年に

舅を見送るまで、彼女は一時に二人の年寄りを看ていたことになる。

店の仕事は忙しく、近郷へ卸もしていたので、関西から古着の荷が入った時には、みな食事する時間も惜しんで、立つたままお握りを食べたものだという。またよその町や村からの客には酒肴や食膳を供したという。まかないの苦労はさぞ大変だったと思われる。その上養蚕までしていたというから驚きである。彼女はその中で賢治を含め二男、三女を生み育てている。さらに賢治と政次郎氏とのいさかい、トシの病や若すぎる死もどれだけイチの心労を増したことだろう。明治四十二年彼女は西鈴温泉で病氣療養したと伝えられるが、賢治やトシや賢治の結核も感染源はイチだったという。大家族の嫁としての過労・心労がイチの健康をむしばんだものと思われるのである。そうした母の辛労を賢治はどのような思いで見えていたろうか。

賢治の詩に次のようなものがある。

「斯ういふ角だった石ころだらけの／いつばいにすぎなやよもぎの生えてしまった畑を／子供を生みながら／また前の子供のぼろ着物を綴り合わせながら／また炊爨と村の義理首尾とをしながら／一家のあらゆる不満や欲望を負ひながら／わずかに粗糲な食と年中六時間の睡りをとりながら／これらの黒いかつぎした女の人たちが耕すのであります／この人たちはまた／ちようど二円の肥料代のかはりに／あんな笹山を一反歩ほど切りひらくのであります／そしてここでは蕎麦が二斗まいて四斗とれます／この人たちはいったい／牢獄につながれたたくさんの革命家や／不遇に了へた多くの芸術家／これら近代的な英雄たちに／はたして比肩し得ぬものでございませうか」(詩ノート一〇六三番)

ただ黙々と人のために身を粉にしながら、報いられることの少ない辛労の一生を賢治はここで顕彰しているのである。この農婦らと重ねて、境遇さえ異なれ、同じく営々と家族のために働き、心を碎く自

身の母堂の姿を見ているのではなからうか。

また最後の病床で整理された「文語詩稿一百篇」には「母」と題した詩がある。

雪袴黒くうがちしないの子瓜食みくれば

風澄めるよもの山はにうづまぐや 秋のしらくも

その身こそ瓜も欲りせん 齢弱き母にしあれば

手すさびに紅き萱穂をつみつどへ 野をよぎるなれ

（ちくま文庫「宮澤賢治全集4」）

ここにはけなげでもの悲しく、どこかなつかしい（日本の母）の面影がある。へその身こそ瓜も欲りせん 齢弱き（としわかき）母といわれるが、彼女は幾つで嫁ぎ、幾つで母となつたのだらう。子を負いながらまだ十代の匂いさえ残しているようではないか。

当時の風習として、心身共に未成熟で嫁ぎ、それこそ（酒呑童子に連れて来られて）という気分です、慣れない環境に投げ込まれる。夫との生活に馴染むより、まず（嫁は労働力）（嫁は舅、姑に仕えるもの、舅、姑の氣に合わなければ離縁されても仕方がない）との厳しい視線に応えなければならぬ。そんな中で慌ただしく母となり、若い労働する体こそ、甘い水気の多い瓜を欲しているのに、（自分は母だから）とけなげにこらえている。

賢治は友人に「女の憂いは、二言三言話しただけで解るものだ」と語つたそうだが、この詩を読むと、賢治の目はここまで届いていたのかという感慨が浮かぶ。これは単なる想像上のもではなく、賢治が

身近に見ていた多くの母の集約像ではなからうか。

賢治の母が実際に、食べたいものも自由に口にできない若嫁時代を過ごしたかどうかはわからない。しかし裕福な家庭であつても、女、子供の日常は質素であつて、ご馳走は往々作り手を素通りして、客や家の主人、夫たちに供された。賢治はそうした小さいことも、当たり前と見すことのできない目を持つた子供だったのでないか。

大家族の長男には大別して二つのタイプがあると思われる。一つは皆から甘やかされて、他への配慮をまったく欠く者。もう一つは身近な母、兄嫁などへの同情や義憤から、次第に世の中の弱者へと目を開いてゆく者と。賢治は当然後者であり、こうした感性が後年の「世界が全体幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」との言葉を生みだす源となつたにちがいない。賢治は幼時から伯母や身内の女性たちの世話になり、成長してからも彼女らの病氣見舞いなどにマメに付き合っている。表に現わされない女性の感情を敏感に捕らえる彼の感性は、こうした身近の人々との交情から自然に養われたものであろう。

しかし私は、へ昔の女はこれだけ苦労して家族のために尽くしたのだへこれが本当の母親だ」とか、へ賢治という人はここまで見ている偉い人だつた」というためにこれらの詩を引用したのではない。賢治が描きとめたこの、往時にはありふれた光景も、読む者が同じフィルタ（感性）を持つていなければ、何の感慨もなしに読み過こされてしまうほかない。そして感性は経験によつて磨かれるものだから、こうした文章が読み過こしにされる危険性は、今後ますます増えるに違いない、と思わずにいられない。

時は移り人は変わる。こうしたけなげなうら若い母も、若いままでいるわけではない。大家族制の時代には、往々にして年老いた彼女らが若い「嫁」をいびる鬼の姑へと変貌したのであり、現在では、世

間並に結婚し、出産し、子育てを終える頃になつて「私の人生は何だつたんだらう」という疑問に突き当たる母たちが増えている。

私事になるが、私の母は「私はお父さんのところへきたくて（嫁に）きたのではない」へ生みたくて（お前たちを）生んだんじゃない」へ子供がいなければとつくに別れていた」を口癖としていながら、娘たちには自分と同じ道を、ただし「よりうまくより幸せに」生きることを求め、私のつまづきによつて大きく傷ついたのである。母と私のような互いを傷付け合う母娘関係が、特殊で例外的なものとは思えない。献身的な妻、母としての、あるいは結婚しない、子供を持たない人生も、自身の生き方として選んだものなら、たとえ失敗しても悔いは少ないのではないか。今の私たちは昔とくらべ、はるかに選択の自由とチャンスに恵まれている。選ぶ自由と責任こそ自立の根本ではないか。

私はまたこの詩に、賢治母子の過去の何らかの不充足感が反映していると感じる。それは先に見たような賢治童話の背景にも関連することだが、イチは子に対して有り余る愛情を抱きながら、実際には肌で子と接する時間さえ十分に与えられなかつた母ではなかつたろうか。彼女はまず第一に一家の主婦であり、舅姑に仕えねばならぬ。子供は次々生まれてますます手が掛かるようになる。しかし舅、姑の世話を、雇人まかせにするのは「嫁」の道に反する。となれば、忙しすぎる彼女は心ならずも上の二人、賢治とトシをひと手にまかせたのではないか。

年譜によれば、六歳の賢治が赤痢を病んで入院した際も、政次郎が付き添つていて感染し、以来健康を損ねたという。イチは家事と年寄りたちの世話で手が放せなかつたのか、赤子に感染させることを怖れたか。政次郎が心配のあまり自ら買つて出たものか。

また幼時の賢治は当時、不縁となつて戻つていた伯母ヤギに可愛がられ、熱心な信心家の彼女から子守歌がわりに「正信偈」「白骨の御文章」を教えられたという。忙しい母親に代わつて、祖母や伯母が小さい者を可愛がり面倒をみるのは、大家族ならではの美しい情景といえる。しかし引き離された母と子にとつてはどうだつたらうか。推測でしかないが母も子も表面的には納得しても、何らかの不足感を後に残したのではなからうか。

賢治は幼時から石に興味があつたという。どこか孤独の陰りが感じられる趣味ではないか。また弟、清六の「家族との食事でも遠慮がちにものを食べていた」との挿話にも同じものを感じる。私は賢治とトシの結び付きのそもそものは、満たされない同士の代償的な親密さだつたのではないかと思う。そして母に代わつて世話をしに出てくる、愛情に満ちてはいても、口やかましく重苦しい父への拒否、逃避願望が、先に見た賢治童話の欠損家庭へと投影されているのではないか。また「病気の母」は、すなわち「無力な母」、あまりにも模範的な「嫁」であつて、子供の気持ちに応えない母イチへのもどかしさが、「病氣」という設定を経て「勞らるべき母」に転換していると見られるのである。

私は、賢治が将来の進路や家業についてあれほど父と衝突しながら、最後まで父と決裂しなかつたこと、家から離れようとしなかつたについては、母や弟妹に対する愛情、義務感があつたからと信じる。賢治の生は短かつたが、それでも大正の末には念願の家業の転換、質・古着業から、建築資材などの卸小売業へ、を遂げているし、弟や妹たちの結婚も見届けている。自分の生業をおろそかにし、一生独立者の道を選ばなかつた賢治ではあるが、最後まで宮澤家の長男の責任は投げなかつたのだ。それでいながら長男としての重い責任（跡継ぎを生むこと）を拒否したのだから、賢治もつらかつたらう。

(五)

再び「家長制度」へ戻つてみたい。この中で賢治が強調しているのは、成人して父以上の力を持つかもしれない息子の、父に対する無条件の服従である。へもし私が何かちがつたことでも云つたら、そのむすこらのどの一人でも、すぐに私をかた手でおもてのくらやみに、連れ出すことはわけなさうだ」という文章がひとつのキイになりそうだ。へ私がちがつたことでも云つたら」とは、当然へ私が彼等の父に、言うべきでないようなことでも云つたら」ということだろう。

これを先ほどのへこの女がどんな悪いことをしたのか」との関連で考えてみよう。ここで一貫しているのは、へ家長は絶対正しい」という秩序意識である。息子たちは率先して父―家長を守り立てなければならぬ。家長の体面が保たれてこそ、彼らも大きな顔をすることができるのである。もし彼等が家長の權威を無視したり、間違つた振る舞いをしたら、不名誉は家全体へ及ぶのである。

この場合、女の振る舞いはごく些細なことであつても、客人への不作法―自身の面子を損ねるものと家長が判断したのであろう。家族の不作法を黙つて見逃していたら、家長自身が礼を知らない者とならなければならない。へわたしはまつたく身も世もない」とは、自分が来たばかりに女は撲られ、皆が氣まづい思いをしなければならなかつた。その経緯を賢治がよく承知していなければ、出てこないセリフなのである。

次に、この家長とは正反對のへ弱い」家長が登場する「泉ある家」という短篇を読んでみよう。「家長

制度」よりは長いので必要部分だけを抜粋することとする。

郡から依頼された土性調査中の学生、または若い技師の二人連れが、夕方近く山の中で宿を探すうち、人品の卑しくない（元役人風）の老人と出会う。彼等は、近くの鉱山でここに宿があると聞いてきたと話す。老人は宿はないという。しかし何か老人には心当たりがありそうな様子で、しげしげと彼等の疲れた、邪気のない様子を眺める。結局彼らは老人の家に泊めてもらうことになるのだが、その時の老人の描写をみてみよう。

老人は眉を寄せてしばらく群青いろに染まつた夕ぞらを見た。それからじつに不思議な表情をして笑った／（青金で誰か申し上げたのはうちのことですが、何分汚いし、いろいろ失礼ばかりあるの）／（いいえ、何もいらないので）／（それではそのみちをおいでください）（ちくま文庫「宮澤賢治全集」8）

こうして彼らが案内されたのは貧しいあばら家で、老人のほかには無口な若い女がいるきりである。粗末な食事が供されて、疲れた彼等はうすべりの上ですぐ寝につく。しかし夜更けに、台所の方がやがやしている気配で目を覚まされる。どうやらそこでは酒の密売でも行なわれている気配がある。老人が彼等の蚊帳のすぐ外に寝ながら、心配そうにそちらに気を配っている様子も感じられる。

やがて勘定をして彼らが出てゆくと、老人からは（安心に似たやうなしづかな波動が）伝わってくる。しかし間もなく、この主人の心配が現実になって現われ、昼間の（じつに不思議な笑い）の正体も明らかになる。

おもての扉を誰か酔ったものが歌ひながら烈しく叩いていて主人が「返事するな、返事するな」と低く娘に云っていた。さっきの男も帰って娘もどこかに寝ているらしかった。／「寝たのか、まだ明

るいぞ。起きろ」外ではまたはげしくどなった／（ああこんなに眠らなくては明日の仕事がひどい）富沢は思ひながら床の間の方にいた斉田を見た。／斉田もはつきり目をあいていて低く鉢夫だなど云った。富沢は手をふつて黙っていると云った。こんなときものを云うのは老人にどうしても気の毒でたまらなかつた。／外ではいよいよ暴れ出した。たうたう娘が屏風の向ふで起きた。そして（酔ったぐれ、大きらひだ）とどうやらこつちを見ながらわびるやうに誘うやうになまめかしく呟いた。そして足音もなく土間へおりて戸をあけた。外ではすぐしづまった。女はいろいろ細い声で訴へるようになっていた。男は酔っていないやうな声でみじかく何か訊きかへしたりしていた。それから二人はしばらく押問答をしていたが間もなく一人ともつかず二人ともつかず家のなかにはひつて来てわづかに着物のうごく音などした。そしていつばいに気兼ねや恥で緊張した老人が悲しくこくりと息を呑む音がまたした。

この娘を、老人に買われてきて売春しているのだと解釈する向きもあるのだが、「雪国」の舞台である湯沢のような観光地で、芸者などを抱えるのはわけがちがう。こうした山の中のうら寂れた家で鉢夫相手の密売春をして、元がとれるものだろうか。娘も素人々々しているし、老人にもそんなづぶとさはなさそうだ。むしろ血のつながった身内だからこそ、こつとも恥じ入っているのではないか。

年頃からしてこれは老人の孫と見ることが自然ではないか。とすれば「なめとこ山の熊」のように、息子夫婦が先に亡くなり、老人と孫だけがとり残されて困窮していると考えられる。あるいは老人のわけありげな零落ぶりから、年取ってから思いがけない色恋沙汰をしかして得た子で、親類縁者からも見捨てられ零落したという想像も成り立つ。となれば娘を生んだ母親はどうしたろうか、空想はいくらで

もふくらむ。

空想ついでにいえば、賢治の生きた時代にも後にも、農山村からは年々義務教育を了えたばかりの少年少女が、食わせかねる親の手元から大勢都会へと押し出された。男は工員、丁稚など。女の子はわずかの給金目当て、口減らしのために女中奉公や、女工として働きに出るものが多かった。そうした中に、いきさつはどうであれ、身重になつて秘かに親元に戻つてくる者もいた。こつそり産み落とされた子は、〈戸籍を汚さぬ〉ため親の籍に入れられるのが便法であつたという。身軽になつた母親は、早々に都会の巷に戻つてゆく。母親を姉と呼ばねばならぬような不幸な子を残して。この物語の女にもそうした薄幸な陰りがうかがわれなくもない。田園を、山野を蚕食する都会は、そのようにして人間をも凌辱する。賢治が貪欲な都会・都会人を嫌悪するのは、そうした不幸な実例を見聞きしていたからと思わずにはいられない。

老人が、たかがゆきずりの赤の他人の前に、過剰なほど恥じ入りつつ、実際には闖入者と女のどちらも制止することができないということは、老人が女の表向きにはできない稼ぎに依存している弱い家長だということであろう。しかしそれでも老人は、客に対し恥じ入るというポーズは示しているし、娘に對しても「返事するな、返事するな」と一応の制止はしているのである。

おそらく酒の密売やら売春やは、生活に迫られた娘が仕方なくやつていることで、老人は見えて見ぬふりをするほかないのだろう。もしこの老人が世間に対して、へどうにもお恥ずかしいことで。私もよくないことは重々承知しておりますものの、ではどうして食べていつたものか。それを思うと止めかねるのでございます」といったふうなポーズをとつていれば、家長として最低の体面は守られているとい

えるのではないか。世間の人も、餓えて死ぬと言う覚悟のない限り、その家長を正面から侮辱することはできない。

私もこの老人に同情は感じるが、その過剰な恥の現し方にどことなくずるさも感じられて、どこにも逃げ場のないこの女にさらに同情せずにはいられない。前借りに縛られ親元から引き離されて、芸者や娼妓に身を落とすのも悲惨だが、生まれ育った家で、顔見知りの人々の間に住みながら、わずかの金のために身を売り、人のあざけりを受けるのは針のむしろにいるようなものではないだろうか。

しかし作者たる賢治の同情も、老人に傾いているかに見えて、その過剰な恥の感覚を丁寧に描出しているようである。その割には、この女の描き方に冷淡なのではないかと思われる。むしろへたうたう娘が屏風の向ふで起きた、そして（酔ったぐれ、大きらひだ）とどうやらこつちを見ながらわびるやうに誘うやうになまめかしく呟いたなどの描写に、この女を異性として感覚している。若い男性としての賢治のなまの存在が伝わってくるようだ。賢治も若くて、それほどゆとりはまだないのであるうか。

こうして創作と現実の家族関係を見てくると、賢治にとって「家長制度」がどういうものだったかが、見えてきたように思う。では家長自身にとってはどうなのだろうか。

政次郎の場合をみてみよう。喜助は二十一歳の政次郎に家業をまかせはしたが、死の二年半前まで、二十年も家督はゆずっていない。政次郎は実際に家長の役目は果たしても、家長はあくまで喜助である。その喜助に問題があり、イチが苦勞したということは先にみた。しかし政次郎には、道徳や、仏教の制約があつて、老夫に意見することができなかったのではないか。また政次郎が正面から意見したのでは、老家長のプライドを傷つける怖れもあつたろう。

また賢治の行ないも、どれだけ政次郎の体面を傷つけたことか。親のおかげで立派な教育を受けながら、定職にも就かず、わけのわからないものを書いてブラブラしている。法華に凝って親に改宗を迫り、誰知らぬ者のない町中を法華の寒行をして歩く。あぐくは東京まで家出し、国柱会に受け入れられず、筆耕で自活していることまで地元紙にすつば抜かれる外聞の悪さ。やつと農学校の教師になつてまともに稼ぐようになって、すぐまたそれを投げ捨てて、百姓の真似事を始める始末。世間の目から見れば、放蕩息子とどっこいどっこの困り者、いや放蕩者の方がまだわかりやすいのではあるまいか。そうした息子に政次郎は、小言は言いながら、言われるままに送金していたのである。

父とのことでも息子のことでも、政次郎には耐えなければならぬことが多かったのではあるまいか。家長もまたつらきかな、である。そうした父のつらさが賢治には見えていなかったのだろうか。そうではあるまい。

もし彼が普通に家業を継ぎ、嫁を取り子を生んで家長となつていたら、父と同じことをし、妻や子にも同じことをせざるを得なかったのではないか。賢治は独身を貫くことで、そうしたことのすべてを拒否したのだと私は断定したい。

通説に反して、家長になることへの拒否が真因で、その結果として禁欲が派生しているとすれば、これまで謎であつた賢治の性に対する矛盾した態度が理解できるものとなる。十八歳の彼は、早熟という言葉こそふさわしいような恋をしているのである。結局は親たちに反対される以前に、自分から諦めてしまつたようであるが。

また農学校時代の賢治は、一方で頑なに禁欲を守りながら、春画を持ち歩いたり、同僚、友人相手に性談義をしているのである。いわゆる猥談のような不真面目な姿勢でないことはいうまでもないが。学

校に裸婦の画像を張り出し、生徒らの不自然な反応に激怒したこともある。原書でハバロツク・エリスの「性学大系」を研究したというのも、科学者である彼が、性を人間の営みの一つとして冷静に評価したいことのあらわれであろう。

宗教的な理由で禁欲する場合は、たいてい性を汚いものとみたり、自分の身内以外の、異性一般を軽侮する傾向があつたり、興味を惹かれる異性を逆に誘惑者と見なす傾向があつたりする。(註)

先に見たように、賢治は異性を軽侮するどころか、苦しい境遇におかれている女性たちに、こまやかな理解と同情を示している。「泉ある家」の項で触れたように、賢治は異性に対して健康な感覚を持つていたようでもある。上の農学校での絵画の挿話でも、彼が生徒たちに健康な性の認識を望んでいたことが知れるのである。

賢治を思う時、時代の制約、環境の制約がいかに彼を孤独にし、彼の魂を押しひしんだかを思う。彼の生きた社会が〈全体として〉、もう少しばかり経済的に豊かで、文化的なゆとりを持ち、男女ののびやかな交遊を許すものであつたら、彼はあんな窮屈な生き方はしないでよかつたのだと思う。もしそうであつたら、彼の魂は、あの童話や詩は、どこまで飛翔していったことだろうか。

(例) 賢治も実は羅須地人協会時代に、熱心な求愛者を扱いかねて魔呼はわりしてはいるのだが、それは相手の性急に接近振りに、賢治がいかに周章狼狽させられたかを示すもの、と見なし、例外としたい。

〔筆者 あとがき〕

私は学歴も高校どまり（東京都立忍岡高校、昭和三十五年卒）で、物を書く素養があるわけではありませんが、宗教界における女性差別の問題に関心があり、藤合不三枝さんと、そういう関係から知り合

いました。もつとも私は彼女のような活動家ではありませんし、僧侶の資格もありません。数年前から母の介護をしていて無職です。主に「フエミニズム・宗教・平和」という小さなグループの機関誌や、宗教関係の機関誌に文章を書いたりするだけで、これまでに雑誌などに発表したりした経験はありません。ただ宮澤賢治にはずつと関心がありまして、（発表の有無はともかく）自分なりの取り組みをしたいと思っております。

そうした不満の一つは、これまでの取り組みがあまりに男性、それも知識人の立場から賢治の背景（家庭、女性）に関して関心が不足しているのではないか、もう一つは仏教方面になります。賢治は、「雨ニモマケズ」的なとらえ方であまりにもきれいなことですまされていたと思うのです。賢治の仏教は既成の仏教の概念や、宗教的な立場からではとても理解しきれない広さ、特殊（神秘）性をもっていると感じます。

私は、賢治は社会の不正や醜さが否応なく見えてしまう人であつたと、そうしたものに對する怒り（修羅の特性）から、現実に取り組んだ人だと感じます。「雨ニモマケズ」は、どこまでも一緒に歩む人を求めた賢治が、結局保阪にもトシにも拒否されたあげく（銀河鉄道のカンパネラは保阪とトシのダブル・イメージからなっていると思いますが、この物語が未完のままなのは、賢治の失望がいかに大きかったかの証拠であると思います）一人の同行者も得ることができず、矢つき刀折れて死を目前にしたあきらかめども、うめきとも私には思えます。そこに至るまでの賢治の苦しい闘いを見ずに、「雨ニモマケズ」的なものを賛美し過ぎることはあやまりと感じます。

（時間と枚数の関係で、今回の原稿は前者を中心にしました。）

94年——女たちは想う

ILO一五六号条約の批准を

奥山えみ子

今年、周知のとおり、国際家族年である。一九七五年の国際女性年を契機に、地球規模で女性問題が課題となり、それが、わが国でも、女たちの社会進出や、自立志向に大きな影響をもたらしたことは事実である。これをもつとき、国際家族年のもつ意義と役割は、極めて大きいものがある。

しかし、昨年、わが国でも、男女適用の育児休業法が施行されたというものの、いまだに、男女雇用機会均等法の理念は、「女は家事・育児」を認めたま

まだし、さらにILO一五六号「家族的責任」条約の批准も手つかずの状態である。これでは、家族年が、女は「労働も家族的責任も」という、新型の性別役割分業の、固定化になってしまっているのではないかという危惧をつよくもつ。国際女性年の成果を下じきに、この家族年の年こそ、ILO一五六号条約批准の好機にしたいものである。

(千葉県 船橋市)

「個」に立つた家族年を

又吉貴美枝

今年、国際家族年（らしい）。おそらく「家族」「家庭」についての行事がたくさん持たれるものと思う。

家族——最小の社会。父と子だけの家族、母と子だけ、あるいは祖父母と孫の家庭、義理の親と子ども、叔父・叔母とめい・おいの家族……様々な形がある。いろんな形の家族があつていい。これからはこういう視点で家族・家庭の問題を論じていかなければ、と思う。多様な生き方が認められつつあるが、家族の在り方も同じだ。そして、そういうのを認識していくことは「個」というものの確立、成熟につながっていくのは。そしたら、日本は住みやすい、生きやすい国になると、思うのですが……

(沖縄県 宜野湾市)

「ごまかされまい」「家族年」

伊藤みさ子

国際婦人年は男性の陰謀……という説が、フェミニストたちの間でまことしやかにささやかれている。急増する非婚女性、とみに下落した亭主の地位、ここらで巻き返さなくてはと意気込んでいるとか。

まさか陰謀で「家族年」になつたわけではないだろ

うが、例によつてマスメディアが、これも、あれも、と利用するのがこわい。

結婚届とは、簡単に言えばセックスが公認されること。そんな公認は不要のセックス自由化の今、「家庭」とか「家族」の名のもとに、女性従属の構造が再構築されるのはゴメンだ。

マスメディアが騒ぎたてないうちに、女の側で「新家庭像」を積極的に打ち出そう。(埼玉県 大宮市)

母親という孤独

小口 正子

久しく影をひそめていた三高(高収入、高学歴、高身長)でしなのに、不況時は「やつぱり大事なこと」という思いが、(若い女性だけにかぎらず)私のような小さな子どもを持つ母親としても、心を何度も、よぎります。まづ先に人員整理の対象となるパートや、派遣社員、女性社員、労働力として、効率の悪い部分をになうおかあさんたちのことを思うと、収入は夫ま

かせて暮らしていることは、のうのうとして安易な生き方だと、とらえられたとしても：です。

なんとか日々の中で、自分自身でありたいと思いつながら、このいなかで、三高の夫を持つ私にとつて、子どもをだれにも気がねなく、安心して預けられるところがないことが、足かせのようになっていきます。現在の保育園の制約の中では（ほんとうは子どもに、思いきり遊ばせてやりたいのです）。仕事も家庭も思いきりすることは不可能です。どちらも適当になります。（三高の夫は夜昼なく忙しく、土日もなく仕事ザンマイですから）。このいなか地方都市でさえも、地域の人々はそれぞれに忙しく、今、おもに母親だけが育児をしているのです。母親だけで子どもの育児は対応できるものではありません。（青森県 弘前市）

「主婦の目」は黒いゾ

小田 桂子

郵便料金が値上げされる。値上げのうわさは聞いて

いたが、この不況の折、まさか：と思っていたのに実現することになった。

新聞の記事はこの経過をわずか数行でまとめている。『郵政省は十一月二十九日、来年一月二十四日から実施する新しい郵便料金を決めた。同日の郵政審議会で、十一月十六日の諮問の通り答申を受けたもので、はがきは四十一円を五十円、封書は六十二円を八十円にするほか：（中略）平均値上げ率は二四％になる。物価問題に関する関係閣僚会議で了承を得たうえ、正式決定する』

*

公務員というのは、国民が税金で雇っている人びと。郵政省はその人びとをまとめているところ。とすれば、民間企業で言えば株主は私たち。郵政省は会社にあたるわけだから、民間の事業だとしたら、株主総会で大もめになるところではないだろうか。

ほんの何十人かの委員による郵政審議会が答申すれば、それがそのまま通ってしまうシステムなんて、民間企業なら決して許されないことだろう。

郵便局で働く知人から聞いた話だが、大口の発信者には、ものすごく率のいい割引制度が何種類も用意されているという。そして、その割引制度は、これから変わらないという。

“族議員”と呼ばれる人たちがこういうことに関わっているのかいないのかわからないが、ゼネコンならぬポストコンみたいな、伏魔殿が何となく感じられてしまう。

「どうせ主婦なんて何も気づかないだろう」とお役人はお考えかもしれないが、主婦も“事件”の度に少しずつ賢くなつてるのでザアマスよ。

(福岡県北九州市)

地域に「頼れる医師」がほしい

横田 ゆり

昨年秋、十年前に手術した乳ガンが再発して、初めて抗ガン剤の投与を受けました。吐気、食欲不振、そして大量の脱毛。現在の私はすっかり頭髮がなくなり、

帽子をかぶらないでは、外出できません。同じ時期に日本中の関心を集めた逸見さんの死は、私にとつてもショックでした。

月に二回ほど通院している病院は、大病院で、患者さんは多すぎ、医師も患者も（こなしていくことで）大変です。

地域の家庭医と呼ばれるような存在が、とても重要で、私自身も、「なんでも相談できる、信頼できる、なにかあつたら往診にきてもらえよう近くに住んでいる医師」を求めているのですが、なかなか得られない現実です。

(宮城県仙台市)

「脱北入南」を

伊良部裕子

地に足をつけて、が私の信条。

遠くのことには思いをはせることより、はるかむずかしい。

地に足をつけるということは赤裸々な人間関係と直

面すること、かついいことはできない。私のすべてが丸見えだ。

私の地面とは、家庭のこと。夫と妻としての向かい合い方。

母と子供との……

そして、毎日通う職場の中でのあり方。

労働組合女性部の部員としてのあり方。

地域レベルでいえば沖縄県のこと。

国際レベルでいえば東南アジア・台湾・中国・朝鮮

半島のこと。

脱北入南の思想を大事にしたい。

そして今年は沖縄戦を焦点に合わせた沖縄の歴史をじっくり学んでみたい。
(沖縄県 那覇市)

被害者意識に心を奪われまい

田中 幹子

昨春秋、生活の中で、自分たちのできることとして反原発運動を続けている若いお母さんからお話を聞き

ました。

「私たちはチェルノブイリの事故後、“原発いらない、命が大事”を合言葉に、原発のおそろしき、安全な食べもの、放射能から身を守ることを中心に活動をはじめた。声をかければ関心のある人は集まったが、月日がたつと、それ以上運動が広がらないことに気がついた。被害者意識が先にたつて、自分が加害者であることに気がついていなかった。都会の電気にかまわなかった便利な生活のウラに、原発で働く人、不安をかかえながら原発の近くで暮らす人、原発の建設を拒否しつつづけている人がいることを知り、大量生産、大量消費、大量廃棄の今の自分のくらしを、自分を変えなければ、本当の運動ではないことに気がついた」

*

日本は今、戦後最大の政治的・国民的危機に直面しているのではないだろうか。政治問題も、マスコミの影響でスキヤンダル興味化し、一方で無関心層が広がっています。社会気運はいまだバブル時代の金儲けグルメ、享楽主義が漂い、不況は一層自己中心主義や

退廃を深める傾向がみられます。

女性が被害者意識に氣をとられ、自分の生活と意識を変革することに躊躇していると、かつての国防婦人と同じ様な道を歩んでしまうような氣がしてなりません。(へあごろ)のような地道なねばり強い活動が一層大事な時期だと思います。

(東京都 立川市)

いま考えていること

川 寄 昌子

私は、今年三十三歳になる。

女は、二十歳代後半から三十歳を超えるぐらいから「おばさん」呼ばわりされ、自分でも「歳をとった」と思い始めるようだ。実際よりも「もう若くはない」という暗示にかかり、なにかを諦めたり、後ろ向きになる人も少なくない。

まあ、たしかに長く人生を歩めば、いろいろなことを経験・学習し、自分のスタイルもでき、行動も決まってくる。いわゆる「守り」に入り、新しいことも

のとの出会いも少なくなる。

その結果、「毎日が同じでつまらない」「疲れるようになった」「やつぱり歳かな」ということになる。

けれども、それは、言い換えれば、怠慢になり、臆病になっているのだろう。だいたいなにもしないで「つまらない」のは当然だ。

「安定・安心」と「退屈」は背中合わせ、「エキサイティングな楽しさ・スリル」は「リスク」と表裏一体。ワクワク生きるためには、それなりの行動を起こす必要があるし、努力もいる。

いずれにしろ私は「エキサイティング」に生きたい。だれの人生も結局は「うたかたの夢」——踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損々——と思う。

(東京都 新宿区)

"政治改革" はダイベートから

青 木 由 美

職場の会議を、いつも「くだらない」と思いながら、

浮世の義理と受けとめて参加していたが、NHK教育の「ことは変わる」という番組で、その改革に取組んでいる企業が多いことを知った。小学校から徹底的なディベート（討論）教育を行なっている欧米人に到底太刀打ちできない日本人。国際化時代のいま、「企業内ディベート教育」を始めた、ということらしい。

その改革策の一つでおもしろかったのは、「立つて会議する」試み。立つていると居眠りができない、必ず発言したくなる、発言は簡潔で要領を得たものになる、等々のメリットが報告されていた。国会でも、一度「立つてディベート」してみたら、少なくとも今までのおかしさが白日の下にさらされるのではないだろうか、と思った。

企業が指摘する「日本人の会議の特徴」は、

一、筋道を立てて話せない

二、何を言いたいのかわからない

三、わかりやすく説明できない

だというが、日本中の議会、中でも国会から、まずディベート教育が必要なのではなからうか。ビデオにと

って聞き直しても意味不明なことは多いうえ、論理の筋が通っていないものがほとんど。しかもやたらに多い修飾語。あの修飾語をバツサリ削ってしまつたら、何が残るだろう。

土井議長が「さん」で呼ぶことを始めてから、地方議会にも「さん」が広がり始めたことが「あごろ」のTOPICSにも載っていたが、そういう呼びかけひとつからでも「改革」は始まる。

土井さんは、衆議院初の「国会白書」をおまとめになったそうだが、ディベートの真髄についての記事も加えてほしいものだ。
(神奈川県横浜市)

「からだの感じ」を大切にしたい

北野 ゆき

生活を楽しみながら

体で感じるここちよさ

不快さについて

ゆつくり考えていきたい

と思つてしまふ

急いで行動することが

必ずしも自分のためにならないことが

少しわかつてきたところです。（北海道 札幌市）

何か気になることばかり……

西田冬至子

一人ひとりの生き方はとても大切だけど、家族・社会のあり方も、とても気になります。

毎日食べる食物のほとんどを外国から買つて、安全で美味しい食物を食べることさえ、ままならない現状。英語教育が盛んになる一方で、日本人の心、文化ともいえる日本語がとても軽薄なものになつてきていたり。真剣に考え行動するために必要な知性・感性を十分育てない教育の現状、とか、あいかわらず“弱い者”をないがしろにした政治も。

これからどんな社会を作つたらいいのか、私たち一人ひとりの自由と責任を思います。（兵庫県 三田市）

健康で地球にやさしく

加藤千代子

〈あごろ〉と出会つて半年です。

まだ何もわかつていませんが若いエネルギーと柔軟な考え方が硬くなつた頭に入つて楽しみに読んでいます。

人間として身も心も病んでいる私は、まず健康をとり返すことです。自然に返つて生きて行くことからはじめ、食事も自然食、水も汚さず、地球にやさしくすること、子孫まで生きて行く上で美しい地球であることを願つて、努力して元気に生きて行きたいと思っています。

今から老人社会になつて来るその中に自分もいることになるので、寝たきりにならない方法とか、老人の生活問題のことなど、考えることはたくさんあります。自分がシツカリと自立してから社会のためにとっています。（愛媛県 新居浜市）

想像力ゆたかになりたい

白井 博子

バブルがはじけて世の中不況だ、平成の恐慌だ、とさわがしい。たしかにそのとおりなのだろうが、でもなんだか腑に落ちない気もする。

経済は常に右肩上がりに成長するものだとする考えがおかしいと思うし、バブル自体が異常だったわけで、よくよく落ち着いて考えてみれば、不況だといいながら現在の生活水準は六〇年代・七〇年代とくらべてみても、まだましなのではあるまいか。

消費をあおることだけを考えるのではなく、もつと今までの生活を見直して、地道な生活を心がけたいと思う。

お正月に犬養道子さんの「人間の大地」を読んだ。私たちがいわゆる先進国といわれている人びとが、どれほど、第三世界の人々の犠牲の上になり立っているかが、よくわかる。そして、どれほど地球環境を汚染し

ているかということ……。

その環境汚染・環境破壊をする最たるものは戦争であるということをも肝に銘じたい。私はもつと他の地域の人びとに対して想像力をはたらかせて、何か自分のできることがないか、考え、行動に移せるようになってい。

(千葉県 船橋市)

性差別とのたたかいを

小史にまとめる

山本 和子

いつの時代にも個としてもっている自身をはなれては何もできません。そしてそのときの社会もそれぞれの個を大切にすることでなければならぬと思っています。

私の場合は何よりも冷戦後の世界が、混沌としていて不透明ないまの時代、日本の憲法が世界をリードする値打ちあるものと思っていますし、私自身は性差別を払拭するために微力をつくしたいと思っています。

かつて性差別をたたかい、いまあらたにたたかつて
いる複数の原告たちと小史？を出す予定です。

今春になると思いますが、出版のあかつきはぜひ読
んでいただければ幸いです。
(三重県 鈴鹿市)

自分の好きなことを主張しよう

仲村乃梨子

結婚をして子どもが生まれてから、何となく家の行
事が決まってしまった。

一月一日は夫の家で正月の挨拶、一月二日は私の家
へ挨拶、一月四日は夫の母（姑）の誕生パーティー、
三月二日は夫の家のお墓参り、八月のお盆は夫の家
族と共に二泊三日で海水浴、九月二日は夫の家のお
墓参り、というのが年中行事である。

たいしたことではないが、私にとつてはこれが大変
な苦痛である。何故なのだろうか？

まず、お正月休みにしろ、お盆休みにしろ、私にと
つては普段できないこと、たとえば本を読んだり、原

稿を書いたりということに時間を使いたいのである。
あるいは新しい場所に旅行に行ったりもしたい。でも
七年間、変わらぬ行事が続いている。

しかし考えようによつては家族行事があるから、姑、
夫の弟とも一緒に顔を合わせることができ。だから
行事は大切にしなければとも思うのだが、毎年同じこ
との繰り返しだと創造性がなくてつまらない。特に夫
の家族と寝食を共にするときには、育った環境の違い
からか、「間」の取り方が微妙に違うのが辛い。

また家族行事の時こそ、夫がいて姑がいて夫の弟が
いて大人の手が一杯あるのだから、私は子育てから解
放されてもいいと思うのだが、そうはいかないのが現
実である。それで私はイライラしてしまうのである。

子どもが小さいときは、一人ゆつくりコーヒを飲
みながら本を読みたいとか、好きなショッピングを心
おきなくやりたい、などがささやかな願望である。そ
れなのに子どもだけでなく、夫、姑、弟までが連なる
行事は私から生活の意欲を奪う。

私の新年はいつも、この愚痴から始まる。

八歳になった子どもは「お母さんは何をしたい」と聞く。私は「一人になりたい」と答えるのが常だったが、今年は真田広之の出るお酒のテレビCMを見て、「これだ」と思った。こたつの上に好きな酒、つまみをおいて一人静かに飲むのである。

そうよ、結婚してからは好きな食べ物、好きな音楽、好きなテレビ、好きな……みんな中途半端になった。何となく相手に遠慮してしまっていた。好きなことから遠ざかってしまうのが、結婚かも知れない。だったら、これからは自分の好きなことを主張していこう。社会に対しても、難しいことではなくて好きなことを堂々と主張できるようにしたい。（東京都小平市）

一人でも多く女性を議会に出そう

市川 泰子

昨年九月、私は神奈川女性会議のメンバー十七名とスウェーデンを視察してきました。

「スウェーデンが現在のように高福祉になることがで

きたのは？」

「女性の地位が高くなったのは？」

の二点をたずねて……。

そこで得たものは、

「八十年間、内外ともに戦争しなかったこと」「女性が政治に参加し勇敢に発言したこと」が大きな理由であることがわかったことです。

まさに「平和なくして福祉なし」です。

小選挙区になれば、女性の国政参加はますます困難でしょう。地方分権を実現するため、今、女性は地方議会に一人でも多く出ようではありませんか、また出そうではありませんか。日本を変えるのは地方の女性たちの地道な活動だと思っています。

（神奈川県 小田原市）



熟年離婚で勇氣ある世直し

鈴木喜久子

一九九三年七月の総選挙に敗れて以来、弁護士業務に重点をおいて活動をしてきましたが、この三年半のブランクの間に最も大きく転換したのは、離婚についての女性の考え方と行動の変化だと思います。

同居後二十年以上のいわゆる熟年離婚は、女性たちが、社会の矛盾に身を挺して立ち向かう姿に思えてなりません。

これまでの家庭の中で、最も割の合わない苛酷な仕事を、主婦という名の下に押しつけられてきた女性が、高齢化社会に突入する中で、政治、とりわけ行政の不備に対し、猛然と反撃に出たのが熟年離婚です。理屈をこねたり、大声はあげないけれど、社会のそここで、福祉のあり方、保険や、家族制度、税制等にズバリと刀をつきつけたその重みに、今、男性たちはオロオロしたり、逆上したり……。

女たちの世直し反乱は、ことし一年きつと続くことでしょう。女が政治に関わる重要性の認識とともに、真の平等を実現するひとつのよりどころ、と思います。

(東京都 新宿区)

やさしさのおすそ分け

山辺小百合

「思いきつて離婚して、子どもと頑張ったけど、もう駄目。くじけそうです。どなたかお電話下さい」

こんな文面が、ある女性のネットワーク誌のお便りコーナーにあつた。

事情は異なるが、私にもくじけてしまいそうな長い低迷期が続いたが、ようやく近頃息を吹き返して元氣が出てきた。

夢中で苦しんでいたとき、身近な人ひとの温かさや励ましが何より力になった。少しゆとりのできてきた今、ほんの少しの元氣とやさしさをおすそ分けしたいと思っている。

(千葉県 我孫子市)

バブル崩壊バンザイ！

飛田よう子

この頃、すごく機嫌がいい。

町を歩くと、あちらでもこちらでもバーゲン、バーゲン。

ほんとのお値打ち物が、ビックリするような値段で手に入る。

「一万円札が一万五千円くらいに使えるようになったね」と友人に話すと、「一万七千円くらいよ」と言い返された。

所得税が減税になつても、恩典を受けるのは年収八百万円以上の人だけだという。減税よりも、私たち庶民には物価が下がるほうがどれほどうれしいかわからない。

おもしろいことに「物価を下げる」をスローガンにしているのは財界で、労働組合は「所得税減税」の一点張りだ。たぶん財界は製造原価を知っているから

「もつと下げられる」と思っているのだろう。そして労働界のリーダーたちは、年収八百万円以上なのだろう。

私のパート収入をプラスしても、八百万円には程遠いためか、私は、どうしても、そう考えてしまう。

(東京都 葛飾区)

すけて見えるゴミ袋

鈴木知恵子

東京都民が大反対したのに、とうとう「カルシウム入りゴミ袋でないと回収しない」ことになりそうだ。

「燃えないゴミだけその袋に入れるのならまだわかるけど」

「燃えるゴミは、再生紙の袋に入れば袋も燃えやすくていいのに」

「だいたい、見えるゴミ袋にすれば、燃えないものは入れない、なんて思うのは、男の発想よ」(一同パチパチ)

昼下がりの職場で共働き族がガヤガヤ。

（――女は正直。透明だろうとなかろうと、ちゃんと分別する）という意味だと、最後のことはを私はリカイしたが、（主婦は、台所ゴミでも何かにくるんでプラスチックケースの中に入れて捨てるくらい知恵はある）という、先輩諸姉のコメントを聞いて、出雲

の市長さんに、そつと耳打ちしたくなつた。

結局、「日本全国、カルシウム袋になつたら、メーカーはそれこそ何兆円産業になるのよね」

「要するに、メーカーと癒着してゐるんじゃないの」
が、この日の結論になつたけど、鈴木知事さん、クシヤミしましたか？
（東京都 大田区）

歌集・句集・随想・論文等は BOC 出版部へ

『あごろ』の版元、BOC出版部は一九六四年創業、女性による女性のためのユニークな出版社です。東販・日販・地方小出版・本コミ等の口座もあり、全国的な販売も可能です。
お気軽にご相談ください。

BOC 出版部

〒160 東京都新宿区大京町20-7
TEL 03-3354-3941 FAX 3354-9014

西村 康子

(日本海新聞但馬支社記者)

兵庫の端つこで働いている。

県庁所在地の神戸とは、北極と南極の位置関係である——とでも書けば、どんな所にいるかわかつてもらえるだろうか。

しかし、マスメディアの影響や時のご時勢で、田舎と言えども、そんなに不都合はない。環境問題が盛んに取りざたされる中、ここ何年か森林浴だとか何とかで、かえって都会人が勝手にどこそこ山に入り込んだらしい、なんて噂を聞くぐらいだ。国定公園以外の一般の山がほとんど特定の人物の所有物だと知らない人が多いらしい。心当たりのある方は、田舎の人の寛容さに感謝して下さい。

さて、一九九三年の大事は、やはり新政権成立と米の一部開放化だったと思う。米問題については、政府米の備蓄がないからとアツサリ大量輸入に踏み切った日本の農政に、但馬の大半の農家もカンカンになった。備蓄がそんなに少なかったなんて、コメの輸入自由化対策のための減反だったのかと、心あるJA幹部も農政への怒りをあらわにしていた。私も、アメリカは七品目も輸入を規制しているのだから、日本人の主食である米くらいまだまだ規制の対象となつてしかるべき、と思つていたのに残念だ。「日本の米は他国と競争しても十分勝てる競争力をつけなければ」という意見もあるが、言いわけにしか聞こえない。今回の真の原因は、弾力性のない食糧管理法の欠陥、イコールこれまでの農政の在り方だと言われるだけに、これをきつかけに問題を出し切つてほしい。

*

ここ但馬の農家は、中山間地ちゅうさんかんちでの稲作のうえ冬間は雪が降るなど、米作だけではやっていけず、兼業もしくは冬場、酒蔵へ出稼ぎに行く人が昔から多い（但馬杜氏は有名）。しかし、米の部分開放化が決まってから、米よりも収益が上がる特産物振興を手がけようと主張する町も出ており、死にものぐるいで生き残りを模索する農家の姿勢がうかがわれる。「大規模化」ですべてが解決されるとする歴代政府の政策（無策）に対する庶民の必死の打開策に心痛むが、こうして農家がアクティブになれば、環境汚染問題や自然保護問題も、はじめて国民共有の問題になり得るかもしれない。

農政改革のひきがねになるはずだった政權交代については、印象に残った取材がある。

交代後、利益誘導型で通っている地元の自民党某有力代議士（六十六歳）が党県連会長に就任したというのでインタビューを申し込んだ。きつと、政界における自民党の役割や地元への方策の一つも聞けるだろうと期待したが、現実、否。決意を聞いても、今後の抱負を聞いても、次の選挙戦略のことばかり。最初はなめられたかなと思つたが、数で国を制してきた自民党だけに、本当に一人でも多くの同党議員を当選させたいらしい。当選してしまえば、「あなたの四つの公約は、今どうなっているのですか」などと聞かれることもないと思つているのだろうか。やはり、自民党は、中味から変わってもらわなきゃと実感したものだ。

揺れる自民党がこれからどうなっていくのか、ジャジャジャジャーン。自民党のおかげで、前にもまして政治が、良くも悪くも身近に思え、楽しみになったと言える。

出典は1992年初版のマクミラン社 "American Signs Speak" 「サインが語るアメリカ社会」で、昨年英会話のクラスでテキストとして使ったときは、まさに副題—— Contemporary American Life and Culture Through Its Signs に言うとおりの、サイン（ステッカーや看板やパンフ）を通してアメリカの生活や文化の断面が今を感じさせてくれた。

この表題に関しては、contemporary（現代的）な話題と言うよりは、何度も議論がくり返されてきた、これからもくり返される古くて新しい話題と言うべきだろう。

女性問題に関してアメリカは常に先進国、と我々は思いこみがちだ。が、ことはそれほど簡単ではない。特に私のいたケンタッキー州は、南部の農業州。伝統的なタバコ産業では立ちゆかなくなった後をどうするかで揺れていた。トヨタが、現地労働者を受け入れる体制で、工場を誘致されるというプロジェクトの最中でもあった。

その片田舎のクリスマスシーズンに、突如議論が沸き起こった。「病院で死産とされた報道は嘘だ。ちゃんと産まれた子を放置して殺したのだ。人道上許せない」とカソリック系団体の女性たち（もちろんプロ・ライフ派）が抗議の火の手をあげたのだ。

ご存じのとおり、アメリカは州によって法律が違う。中絶も許されている州とそうでない州があるが、ケンタッキーでは3か月までに限って許されている。「実質的な中絶だ」と、抗議する側は言い、そうだ、そうじゃない、の押し問答が、ひとしきり続いた。私のホスト・マザーのお姉さんという人が抗議派の頭目としてテレビに顔を出し、時ならぬ論争の渦の中にいた。

キャンディス・バーゲンが未婚の母になる（超）人気番組を、ブッシュ時代の副大統領クエールが批判、アナクロニズム（時代錯誤）と冷笑された時も、この言葉がとびかった。クエール氏の感覚では、プロ・チョイス派は、アメリカの良き(?)伝統を壊す元凶ということになるらしい。

今年は国際家族年。一筋縄ではいかぬ難しい問題ではあるが、本腰入れてじっくり考えたい。(くあごら) 特集28号「産む・産まない・産めない」を読み通してみるのも意義深い。

プロ・チョイス (Pro-Choice)
プロ・ライフ (Pro-Life)

奥川 睦

プロ・チョイス (Pro-Choice) ; プロ・ライフ (Pro-Life)

この言葉を耳にしたとき、最初??? だった。

早口の英語がわからなかっただけではない。文脈を説明され abortion (中絶) の賛否との関わりがわかって、やっと輪郭がつかめた。

それでも、言葉としての choice は、産む・産まないのどちらを選んでもいいわけだし、life も母と子どちらの生命にも使われ得るのだから、立場の違いは判然としない。混乱して、どちらがどちらだかわからなくなってしまう。

で、まず、次のカー・ステッカーのキャッチフレーズで意味を確認したい。(数字はオフィスの tel. NO.)

IT'S A CHILD,
NOT A CHOICE
California Pro Life 1-800-924-2490

「選択の問題ではない。それは生命だ。子供なんだ」というのが、プロ・ライフ派の主張。反対に、親の選択権——産む・産まない——を重視するのが、プロ・チョイス派。

念のためステッカー (写真) に添えられた次の説明文を挙げる:

The statement seen in the photo is very serious. It deals with the issue of abortion, one of the most controversial in America today. Those who disagree with abortion and think it should be illegal call themselves "pro-life." Those who agree with abortion and think it should be legal call themselves "pro-choice."

この文の説明でわかるように、プロ・ライフ派は中絶には不同意で法律違反 (illegal) にすべきだと主張するのに対し、プロ・チョイス派は中絶を肯定し、法律で禁じるのは人権侵害、個人の領域に法律はそぐわないとする立場をとる。controversial (議論を呼ぶ) という形容詞も、私の気になる言葉の一つで、思い出がギッシリつまっている。折があれば、稿を改めたい。



障害者情報ネットワーク(BEGIN)が発足

「障害者自身が研究者、情報提供者」を目指して、九四年(「BEGIN」(ビギン))が発足します。

基本原則は

◇障害当事者の主体性および自己決定権の確立をめざします。

◇障害者に対するあらゆる形態の差別に反対し、人権の確立と「完全参加」の理念に基づく共生の社会づくりをめざします。

◇障害の種類や程度を越え、すべての障害者との交流・連帯をはかっています。

◇いかなる形態および種類の差別にも反対し、あらゆる被差別者との連帯を求めています。

上記の原則を支持する障害者、障害児・者の親、現場の労働者、研究者などの参加を求めています。

設立の趣旨と目的は

◇政府・各自治体などの福祉政策の動向に関して迅速かつ的確な情報の収集および伝達を行なっています。

◇障害当事者や、現場の労働者、研究者らによって、各種情報の徹底した分析・検討を行なうとともに、障害者の自立と解放の立場からの法制度、政策作りを進め、社会的に明らかにしていきます。

◇全国各地の障害者およびその関係者らによる様々な運動や実践に関する情報を集め、それぞれの要請に基づいて、それらを提供していきます。

◇地域ごとに草の根的自主的活動を続ける諸団体をネットワークし、意見や情報の交換・交流を促進していきます。

◇月刊「BEGIN」(ビギン)(障害者に関する新しい制度・政策動向などの解説やコメント、差別撤廃・権利獲得の取り組み、ネットワークの活動、情報リストなどを掲載)の発行。

◇年四回、研究誌「ジョイフル・ビギン」を発行。(一号は「まちづくり」二号「自立生活づくり」三号「地域雇用支援センターへの提言」四号「アドバイザー、オンブズマン」の予定)

◇九四年は「福祉のまちづくり条令を全国に」をテーマに、全国十か所で地域研究集会を開催。

◇二年に一回、全国研究集会を開催。

などを計画。入手資料のコピーサービスも行なう由。問い合わせ先は、

千五三六 大阪市城東区東中浜二・二一六

大阪障害者労働センター気付

全国障害者解放運動連絡会議

国家公務員に「介護休暇」？

働く側からの強い要求がありながら、なかなか実現しない介護休暇ですが、国家公務員には実現しそうです。

来年の国会に提出される予定の国家公務員の勤務時間休暇法案に、父母などの介護休暇(最高三か月)が盛り込まれることになりました。ただし、休暇中は無給です。

阻止の可能性が増した「並立制」

「選挙制度改革」の舞台は参議院に。

参議院の議員総数は二五一、過半数は一二六。現在の構成は、

与党一三一(社会七三、公明二四、新生改革等二三、民社十一)

野党一〇九(自民九八、共産二二)

その他十一(二院ク五、無所属六、平ス二)

「社会党から二〇人が反対すれば廃案は確実」という説もありますが、自民の中からも二〇人近くが政府案賛成に回る可能性もあり、予断を許しません。小選挙区制反対の市民グループは、連日参議院を取り囲んで請願・陳情・シュプレヒコール等に必死です。

しかしコメ問題をめぐる対応で、自民党も社会党も、さらに分裂が進みそう。全く絶望的と思われた小選挙区制阻止も、あるいは思わぬ展開になるかもしれません。しかし、その結果が細川政権崩壊につながる可能性も…。連立与党所属議員は、複雑な表情です。

名前のないニュースに名前がつけました

一九〇号TOPICSでお知らせした「まだ名前のない政治情報ニュース」、何人かから長い名前が寄せられましたが、結局「市民の政治」という短い名に決まりました。スローガンは「永田町から市民の手に政治を取り戻す」。毎月第一、

第三火曜夜、現代思想社で編集会議、第一、第三金曜午後二時から送作業。連絡先「東京都目黒区中町二、一九、九、二〇一草の根。

なお、十二月五日号の内容は、参院の小選挙区制状況一見えてきた廃案の展望／連合の議員工作に負けるな／関西でも始まった政治と運動をめぐる討論／労働戦線でも始まった新党論議論など。



意見
意見



一九〇号「政治改革」について、意見を申します

谷 和美

「あこら」第一九〇号の「意見／異見」に寄せられた投稿に対して補足説明を求めたい部分、そして法律の建て前、現状について誤解されている部分について指摘したいと思います。

まず補足説明を求めたい部分ですが、「開票は県単位で実

施してほしい」というタイトルのついた上野さかさんの投稿についてです。

「開票は県単位で実施してほしい」という理由として、上野さんは狭い地区の開票所では「誰がそのお金にに応じてくれか」が明瞭にわかるということをあげられておられますが、

なぜそのようになるのか、どのようにしてわかるのかについて説明願えないでしょうか。

そしてもう一つ、上野さんはこの文章のなかで、「日本の『草の根金権体質』はこれ（都道府県単位の開票の実施）によつて大きく是正されると思います」と主張されていますが、なぜそのように思われるのかについても説明願えないでしょうか。

次に指摘したいなと思つた部分ですが、「投票日は平日に変えてほしい」というタイトルの戸田和子さんの投稿についてです。

その中で、戸田さんは「昔のように「平日投票、投票時間を欠勤扱いにしない」ことにすれば、…（後略）」と言われておられますが、「投票時間を欠勤扱いにしない」という部分は今でも労働基準法七条にその根拠条文が生きています。

それから戸田さんは「投票はあらかじめ登録しておけば勤務先の近くの投票所でもよいことになる」と、助かる人が多い

のではないかとともに言われていますが、小中学校の体育館、あるいは公民館が選挙のときの投票所として設定されることが多い現状を考えますと、どれだけの人が助かるかは疑問だと、私は思います。

最後になりましたが、水野あけみさんの「不在者投票をおすすめします」は、平日における受付時間の延長は、考えていいと思います。また、斎藤千代さんの「選挙制度改革」は国民投票にかけてほしい」という主張には、私は両手を挙げて賛成したいと思います。日本には政治上の重要事項決定の際の国民投票は憲法改正時を除いては規定はありませんが、それならそれで国民投票制度を導入して、その最初のケースとして「選挙制度改革」について行うということにしてでもするべきだと思います。

自分は連立政権側が小選挙区比例代表並立制を、強引に、あたかも唯一の政治改革であるかのごとくにして、押し通すのか未だによくわかりません。



黒人女性監督の映画を紹介したい

伊地知徹生

アメリカ映画の一世紀の歴史の中で、黒人の女性監督の制作した長編映画が全米に公開されたのは、何とこの二十世紀も終わろうとしている一九九二年のことであつた。その作品は、N・Y・ハーレム生まれの黒人女性ジュリー・ダッシュの手によつて作られた『海から来た娘たち（原題：Daughters of the Dust）』である。

この内容は、二十世紀初頭の、アメリカ南部のサウス・カロライナ州とジョージア州の沿岸にあるシー諸島に残る“ガラ”という文化を持つ人々とその生活について、そしてその家族の絆

の話である。遠く海の彼方、西アフリカから奴隷として連れて来られ、この島々に残されたイボ族の伝説が生き続ける“ガラ”の人々の生活が映像的に詩的に描かれている作品だ。ここには、アメリカのハリウッド映画がよく見せる白人男性主義的な視点は存在しない。全編に貫かれたリズムは大河の流れや森の呼吸に似て、見る人たちをゆつたりと包む。

ジュリー・ダッシュが父方のルーツを求め、アメリカ史でも知られざるこの“ガラ”のことを語つたのは、彼女が自分のアイデンティティにこだわる

理由が未だ現代アメリカ社会に横たわっているからにはかならないが、それは單純に社会に抑圧されている黒人として、男性に抑圧されている女性としての立場をいうだけのものではない。作品は声高にテーマを主張せず、全体の表現そのもので見せてくれている。それは六〇年代の公民権運動の時のような激昂した調子で訴える方法ではなく、たぶん今日の黒人女性文学の、たとえば、トニー・モリソンやテリー・マクミランの小説にもみられるような、しなやかさそのものを表現していると言えるかもしれない。

ところで、なぜこの映画を黒人が身近にいない日本で誰に見せたいのか、疑問を挟む人も中にはいるに違いない。しかし、白人すらいない地方都市



でアメリカ映画が人気の現代社会にあつては、それは愚問であつてほしい。

ここで言いたいのは、この外国文化輸入超大国の日本は、一番身近なアメリカ文化でも、こと黒人の文学や映画には興味がないらしく、現実にはせいぜいその興味も黒人音楽止まりであるということだ。この映画「海から来た娘たち」を含め、質の高い黒人映画が今紹介され始めたばかりであるが、今やアメリカの文化の象徴になりつつある黒人文化がこれからのように日本で理解され、受け入れられていくのか、こうした映画がそのバロメーターになるに違いないと私は見ている。

外国の文化を知ることが、ひたすら欧米の白人文化を知ることとともに集約されていた時代と違って、人種の違いにかかわらず、時には我々と同じテーマを抱え、あるいはその考え

方の違いを認識することで、より我々のももの見方や取組み方を深くさせていくことに繋がなくてはならない時代に我々はいま立っている。「海から来た娘たち」をはじめ、黒人監督の映画は、我々の培ってきた社会や国際認識を新たなものにするかもしれない。否、そうあつてほしいと思いつつ、第一回目の黒人映画祭の開催を企画している。

*

日本初の黒人映画祭、ヘシネブラツク一九九四は、一月二〇日（木）から二二日（土）の三日間、渋谷のバルコ劇場にて開催。

映画「海から来た娘たち」の上映は、二〇日の夜六時一五分より。上映前に、作家、落合恵子さんの話がある。関心のある方は、あこら事務局までご連絡を。

看護婦



と



(11)

黒木喜久子さん (2)

増田れい子

昭和七年生まれの六十一歳。のびやかな声で語り、若々しくおおらかに笑う。農水省研究職を退官した夫と二人のこども（長女は中央官庁のキャリア組、長男は業界トップの電機メーカー社員）がいる。

看護婦歴二十八年（中断十一年）、現在I県Y市にある総合病院（三三二床）の看護部長をつとめている。病棟は九つ、看護婦総数二四〇、そのトップにいる。

高卒後、東京通信病院付属高等看護学校を卒業、高看として同病院に勤務（昭和二十九年）。経済的自立を目ざしての職業選択だった。

看護の現場は生やさしいものではなかった。一人夜勤の恐怖、患者のいのちをあずかるにしては技術も体勢もあまりに不十分と自覚するほどに、自信を失い困惑は深まる。

組合活動の成果でようやく看護婦の結婚退職がくいとめられるようになり、黒木さんも結婚（三十四年）したが、やがて夫は単身赴任、育児は人手に頼った。長男出産も重なり限界を感じはじめたのと夫の米国出向が決まったのは同じころ、看護婦ほど重圧の強い職業はない、再びこの職業には戻らないと決意、マニユアル本を焼いて夫と共に米国へ（四十年）。

帰国後、こどものための英語教室を開き、教える仕事の面白さを知る。しかしこれにも限界がきた。自分

の英語の能力の問題に加えて競争がし烈になり、その上、夫が病にたおれた。方向転換。看護婦の資格を生かして一家の経済力をとにかく維持していかなければ。板橋ナースینگホームに再就職したのは五十一年、十一年間のブランクのあとであつた。

黒木さんは、この年を“再起の年”と自ら名づけている。四十三歳になつてゐた。夫は突然病にたおれ、最悪の事態も覚悟しなければならぬ。“再起”するにはあまりにも悪条件が重なつてゐたが、考えてみればそうだったからこそ、黒木さんは立ち上がり、たつた一つ開いてゐた希望の扉を押して、看護婦の資格と能力を生かす方向へ再び歩み出したのだつた。

老人介護を選んだのは、十一年のブランクでいづゆる高度医療にはついていけないと思つたからだ、実際に現場に入つてみると、老人ホームでの看護婦の役割は、考えていたより大きいものではなかつた。

介護の実際になつてゐるのは寮母さんたちであり、看護婦の黒木さん専任の役割は患者の血圧測定や眼薬をさして歩く程度のもの、患者百人に対して看護婦三人（夜は一人）という基準もむべなるかなという感じだつた。

ベッドには骨も筋肉も硬直した老人たちが腕を天に伸ばして横たわつてゐた。これが生きてゐる人間の姿だろうか。はじめて見る老人ホームの光景に、黒木さんは深いショックを受けないわけには行かなかつた。

「そういう患者を寮母さんは背負つて歩いて介護してゐました。その献身にはアタマが下がりました。でも、人手が足りなくて、患者のからだを動かしてやれない、動かさないでゐる間に硬直が起きて、寝たきりになつてしまふ、硬直した人を背負つて歩くという悪循環が起きてゐたのです。

痴呆で徘徊する患者も大勢いました。古い郵便貯金通帳を大切に……。どうしてかという、払い込まれる年金を、こどもがとりに来る、それさえあればこどもがたずねてきてくれるわけです。おカネ

をとりに来るだけの身内でも、お年寄りには待ちに待っている。痴呆になってもそのことだけは希望の光なんですね。

寮母さんや看護婦が、家族からはほとんど見放されたような痴呆徘徊のお年寄りを精魂こめて介護しても、お年寄りが心から待っているのはそういう家族なんです。家族ですこいものだといいことをあらためて知りました」

黒木さんは、そういう状況のなかで、看護婦としてまた一人の人間として、何が出来るだろうか考えた。そして思いついたのが、英語教室のなかで育てたこどもたちと老人との交流だった。

こどもたちにとつても、老人との交流は必要過ぎるほどに必要だと思った。核家族の中で育つこどもたちは、老いや老人を知らない。

それは人間について基本的なことを知らずに成長することと同義語だ。やがて日本は高齢社会になる。そのとき社会を担ういまのこどもたちが、老人について知らなかったらどうなるか。

クリスマスやひな祭り、しょうぶの節句といった季節の節目に、黒木さんはこどもたちとの交流会を企画、立案実施した。

忙しい上にも忙しくなる、労働強化になると仲間から文句をいわれたが、黒木さんは押し切った。

高齢社会とケア体制の充実は、看護婦の自立と能力をたかめる問題ともからめながら、黒木さんが以後もつとも情熱を感じ続けているテーマである。

黒木さんはいま、勤務地の地域医療懇談会にも折々参加しているが、早急に解決しなければならぬ独居老人の問題がヤマほどある。しかし、実際には何ら解決されないままあらたな問題が次から次へ起きてくる……そういう状態である。

「どうどうめぐりなんですね。こういうケースがあります。九十歳の男性です。公団住宅の六階に住んでいるのですが、痴呆症がはじまっています。でも高学歴で大変にプライドが高く頑固に独居を続けています。公務員の長男が近くに住んでいるのですが、アメリカ人の女性と結婚してまして、彼女が主張するには、親と同居する習慣はないというのです。」

娘さんが一人いますが、こちらは神奈川県に住んでいて、夫の老親を介護しています。

地域医療懇談会にこのケースが持ちこまれ検討されました。放つてはけません。出かけてみると、もうこれは言葉ではいえないめちゃくちやの室内です。失禁はしてある、水道はあふれている、人の住んでいる環境ではありません。

私たちはチエをしほりました。そうして、一週のうち二日は公的なヘルパーを派遣する、これは一日一回二時間の派遣、これを二日間、あとはボランティア派遣二日間、訪問看護センターから一日、神奈川県から娘さんに来てもらう日一日……と何とか手当てして、あと一日がどうしても埋まらないんです。

こうして不十分ながら体制をつくって訪問するのですが、ドアチャイムを鳴らしても老人はドアを開けない。開けて下さいと電話をかけると、「イタズラ電話はやめる」とどなる。そしてガツチャンと切る。「ボランティアです、開けて下さい」とまた電話してドアを開けてもらうまで一汗かいてしまう。

食事をつくって食べさせるのですが、三食用意してあげても、痴呆が来ますから三回に分けて食べるということが出来ない。一回で食べてしまうわけです。クスリもそうです。分けられないで一回にぜんぶのんではしまうのです。

老人ホームなどに入居するのは絶対的に拒否します。老人ホームをとてもおそろしいイヤなところと思っているわけですし、あくまでここにいたいと言い張るのです。チャイムが鳴ってもドアを開けないのは、老人ホームへ強制的に収容されてしまうのではないかという恐怖感があるからなんです。

ボランティアの人たちにその老人が何ていうと思いますか。あんなたち、何てヒトのいい連中だろう。こんな老人に親切にしてくれて……、そういわれてボランティアも返事に窮してしまおうのです」

地域医療懇談会のメンバーは、医師、看護婦など地域医療関係の代表、ボランティア、行政、リハビリ医療にたずさわる人々などで構成されているが、持ちこまれる課題は緊急に処置しなければならない難問題ばかり。しかし行政の動きはにぶく、結局地元の女性のボランティアの善意に救いを求めるといふ心細さだ。

黒木さんの実母も、昨年四月、交通事故で入院、見事な高度医療の蘇生術を受けて、いのちだけはとりとめた。しかし植物人間になつて、入院、やがて老人病院に移されるという。自身、老人問題をかかえる身でもある。

高齢社会とケアのテーマに取り組むきっかけとなつたナースィングホームであつたが、夫は幸い深刻な事態にいたらず徐々に回復して行つた。療養しながらの職場復帰を果たし、I県にある機関へ転勤となつた。

夫の転勤にともない黒木さんはI県に新職場を持つことができた。いま勤務するY市の総合病院である。五十三年九月、一戸建ての住宅を買い、移転。しかし長女は大学受験の年にあたつていたので、アパートを借り東京住まい、と一時は別れ別れになつた。

「共通一次の日が雪でね、どんなに心配したことか、いまも忘れず、話題にします」

無理して一戸建ての家を買いこんだのにも理由があつた。夫の職場近くにある公務員住宅に入れば、経済的にはゆとりができるが、あいにくこどもが目ざす東京の大学には遠くて通えない。こどもの大学通学可能ギリギリの地点に住宅を求め、夫も、妻も、こどもたちも、それぞれある程度の通勤通学の労に耐えることとした。

病身の夫、住宅ローン、こどもたちの教育費の増大を背に負いながら黒木さんの白衣の新生活がはじまつた。当時、その病院は一般病棟八〇床と結核病棟三〇床の、規模の小さい地域病院だった。財団法人で、ありていにいえば、近くにある国立大学医学部からの天下り病院、今もその枠組みは変わっていない。

旧海軍航空隊基地内の結核療養所が、前身である。一時間に一本しかないバスに一時間近くもゆられての通勤。東京のベッドタウンでもあり人口急増の土地柄、この病院のほかに勤務に都合のいいところに病院がないではなかった。しかし四十五歳になっており、高看の資格があるというと、それが断られる理由になるのだった。

「あなたのような高学歴の人が来るようなところではない……と面と向かって断られましたものね」

看護婦は若くて医師のいいなりになって安く使えるのが一番……というこの国の看護婦観は、なお強固であった。

看護婦不足は現実でも、キャリアを積み、やる気を示した看護婦が、高齢や高学歴を理由に締め出されてしまうというもうひとつの現実。看護婦不足は単純な不足ではない、それは仕組まれた不足という一面を備えている。

夫が農水省勤務の研究職という背景があり、国立大学病院系統のその病院にアキがあつて再就職が決まった黒木さんだったが、行つてみておどろいた。

たしかに緑の林にかこまれた抜群の環境である。しかし一步病室に入つてみれば点滴のラインにびっしりとアキがついているではないか。患者の家族はゴザ持つて泊り込みにきている。野球の練習中に腎臓破裂を起こして重体になった高校生は手術後安静が必要な事態なのに、受持ちの先生はクラス全員を引き連れて見舞いに殺到してくる。

胃の全摘手術を終えて絶食中の患者の見舞いに、家族親せき一同がこぞつてやつてきて、大福餅を振舞

う。面会時間はあつてなきが如し、朝だろうが夜だろうがお構いなし、田んぼ仕事のあとさきに泥だらけの長靴で病室へ入りこむ。オレの面倒見に看護婦のような他人の手をかりるのはイヤだ、オラの力アちゃん（嫁のこと）にやらせるのだと言ひ張る年寄り。

黒木さんとしてはもう目をパチクリ、クチをあんぐりの看護の現場だった。ここは地方の小さな病院ではあるが、患者二・五人に看護婦一人の特二類というランクの高い基準看護を敷いている。かつてつとめていた東京通信病院と同じ質の看護を確保しなければならぬのに、これでは戦前の病院なみではないか。

「基準看護というのは、入院患者が出るとナベカマコンロまで持つて廊下で家族が煮炊きして泊り込むという、日本のそこで見られた実態を、戦後進駐してきた米占領軍が見てびっくりして、入院治療に必要な寝具や給食は病院側が備えること、家族のつきそいはやめて、患者の看護は看護婦の手にゆだねること、そのために、患者何人に対して看護婦何人という基準を決め、つきそいなしの看護であるという意味での完全看護を実施するよう指導したのです。現在患者二に対して看護婦一人の特三類という基準が最高ランクになつていますが、当時の最高は特二類だった。その特二をとつていながら実態は戦前なみのつきそい看護でしょう。これはいつたいうことか。

基準看護をとり入れてからというものの、患者と家族の愛情、絆を分断するというマイナス効果が生まれたことは事実です、でもつきそいが習慣化すれば、女性は病人が出たら職業をやめなければならないというマイナスを背負いこみます。

事実、その病院では、義父につきそつた息子の嫁さんが心労と過労からでしょうか、義父よりさきにガンで死んでしまったというケースもありました。こういうことを放置してはいけけない。

同じ特二をとつているなら、東京通信病院に入つても、ここでも同じ質の看護が受けられて然るべきです。私は、特二類の基準看護をしなければと燃えました」

（この項つづく）

A HAPPY NEW YEAR '94

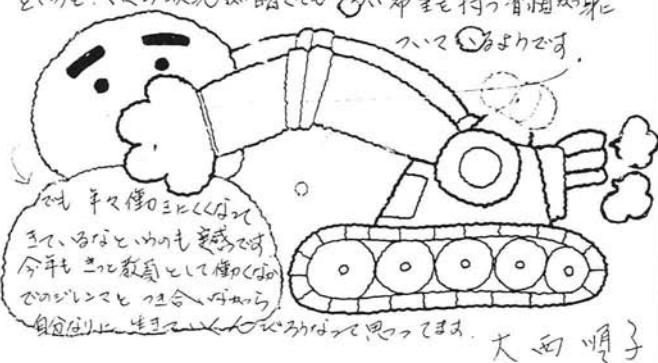


上野千鶴子

頌
春

'94

いつも いろいろな情報ありがとうございます 新しい年の始まり
という、いくら状況が暗くても 心の希望を持つ習慣の身に
ついてるようです。



でも 年々僕のミミしくな
きて、おぼえの心も 変化です
今年も 心に教訓として僕の心
でのジレンマも 場合、何から
自分なりに 生きていこうと いろいろ考えています。

憲法 9 条世界化元年！

昨年11月、青年新党ディスカバリーを結成しました。

今年から本格的に活動を始めますので、

よろしくお願い申し上げます。

東京都文京区本郷 2-3-10 お茶の水ビル 302
03-3812-9612

青年新党ディスカバリー
梅津 慎吾

おめでとうございます。
ワンダフルな年であります
ように……
ウイン女性企画(前東海BOC)
が昨年二昨年と開催しました結婚整理セミナー
(知ってお得な離婚情報)の自まグループとして
シングル ネット ワーク、ワン(個)をきかす
一年間さこやかな会合をつづけてまいりました。
本年は国際家族年 個々大切に家族や地域との関係
を改めて考えていきたいと心に決めています。
あつらのますますの発展お祈り申し上げます。

小林 美恵子



男だつた
自然体で たわもつた

ボーイング・マイ・ウェイ が

女だつと

トウバツリX-キコウな

強引に My Way に

何故?? どうして???

今年も考えたい。

11月末に上野(千恵子)さんの
講演会が素晴らしいでした。
素敵な出会いにハイ!!!

今年も宜しく!

くあじら 松山

あけまして

おめでとうございます



お健やかに新春をお迎えのことと存じます。

旧年は仕事と家事を手抜きして、余暇を充分楽しみたいと願っていましたが、例年以上の忙しさでゆとりのまったくない1年でした。12月には長男が結婚をいたしましたので、母親の役目も半分済み今年こそは『遊ぼう』と思っています。

本年もあたたかいご指導を下さいますようお願いいたします。

年の初めに平素のご厚情に感謝申し上げ、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

1994年元旦

澤田 和子

自宅 〒533 大阪市東淀川区東淡路1-5-3-915

TEL 06-329-3364

会社 〒533 大阪市東淀川区東淡路1-5-2-443

(有限会社 芳泉企画) TEL 06-322-2203

FAX 06-320-3413

猫 犬もらくだ

で



初春

みせ行にひりす

番680 鳥取市幸町22第1-マルニビル 206
スペースMs. (ミズ)

芦谷 美鈴
TEL&FAX 0857-21-5095

自宅
番689-12八頭郡用瀬町
安蔵991

TEL&FAX 0858-87-3770



迎春

昨年も 東京家庭裁判所 世田谷ボランティア協会 泉の会世田谷支部などを通して ささやかな活動を続けることができた感謝のうちに新しい年を迎えることができました
歴史の転換期にある本年も 新たな課題を担って精一杯生きていきたいと願っておりますので 何卒よろしくお願い申し上げます
みなさまのご健康 ご平安をお祈り申し上げます

一九九四年元旦

〒157 東京都世田谷区砧六-三四-十一

☎〇三(三四一六)二〇〇三

近 藤 悦 子

迎春

多分多難多厄と
一層強めてお祈ります。
あけまして有難さん健在なう
智恵百倍の思いです。

語んだ手にさうに力もいめ...

一九九四年 二月 増田 れり子



새해를 축하합니다

新春のお慶びを申し上げます。

在日本朝鮮民主女性同盟

中 央 本 部
委員長 徐 子 連

一九九四年 元旦



ありがとうございます。
 冠婚葬祭の行方は、
 一ヶ月か、おぼつかない
 ます。

〒100 東京都千代田区永田町二一〇一
 参議院議員会館三〇二号
 紀平 様
 子

今日、『あごろ』編集部の皆様。年末の自分の部屋の大掃除を曲がりなりにも終えて、何気なく『あごろ』180号 冠婚葬祭とフェミニズムを手にとって、読んでみました。

この号が来た当時は、会社から「石持で追われる」みたいな感じで解雇された私にとっては冠婚葬祭なんか縁遠い、別世界のことだという感じがして、ろくろく読みもしないで、書棚の中に放り込んでしまいました。

しかし、結婚というものがとにかくにも自分にとって近くなってきた今読んでみると、冠婚葬祭についてこんな問題を抱えている人があるんだ、こんなことを考えている人もあるんだ、またこんなやり方、楽しみ方があるんだということがわかって、ものすごく身近な感じて読むことができました。

何故今、こんなことが考えられるのか、大変に不思議に思えてきます。

来年もどうかよろしく願いいたします。

1993・12・26

谷 和美

「花の乱」だより二一九号（番外（あごろ）編）
 1994・1・10

昨年年頭は、AERA誌上に、藤原良雄氏が日本一の編集者として登場。今年の年頭は、よりによって、「あごろ」誌上で河野信子・福田光子さんが、よりにもよって、藤原書店から「日本女性史」を出されると知り、二年続けて胸の煮えくりかえる新年となりました。
 ・良心的：出版社の労働条件を、フェミニストの著者が問題にすることはない（ただ一人の小さな例外をのぞいて）は、「花の乱」だよりを二九号まで送り続けてよくわかっています。
 ・もとよりそれも予測されたので、裁判にもちこみ、「預かっただけ、雇ったのではない」とか、「労基法はよく知らなかった」とかの藤原証言を法廷で引き出せたのですが。
 「日本女性史」も、タイムカードなし、残業代ゼロ、有給休暇なしで作られていると思います。

片岡 陽子

あけましておめでとうございます

1994.1.1
 仙台市長、宮城県知事への逮捕と、大変な年でした。縣政治不信、市民の言葉では言い表わせないような苦しみを受けました。ここから、どう立ち上がるか、問われる一年になりました。頑張ります。テ981 今年もよろしくお付き合いを願います。
 仙台市青葉区桜ヶ丘七丁目21-29

横林 洋子

あけまして

おめでとーございます

旧年では格別の喜情を賜わり有難くうれしく存じます
本年も相変わらず、交遊のほどいそいそとお祈り申し上げます

一九九四年 元旦

〒731-42

安芸郡熊野町神田一〇六番地

栗原基子

電話(085) 854-6216



頌春

新年を迎えますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

古希となり、よき終わりを考える時期になりました。

平和のうちに生きる権利を求めながら

悔いのない生活を送りたいと願っています。

かつて裁判をたたかい、いままたかつている

複数の原告たちとともに小史を出したいと計画申

です。春には出版の予定です。その節はなにとぞ

よろしくお願い申し上げます。

一九九四年 元旦

鈴鹿市神戸九一八一三

山本和子

印

東海版「初なきの朝」・川瀬 長之 氏

謹賀新年



さすがにいままでは言えなかったけど、いつも
ありがとうございます。ことばをこころ
に願います。マカがスランプを脱し
服薬は苗子に入れたため、引越がなびと
まだどこにいます。トホホッ



東京都国分寺市東元町1-34-11

(〒185) えのき荘8号

田井亮子

TEL/FAX 0423 (24) 6054

可能性

坊主なまこはで
お年の市挨拶と
いっしょです



一九九四年元旦

森崎民子

印

鳥取版「新元」・浅海 清

1994·初春

恭賀新年

お健やかに初春をお迎えのことと存じます
本年もなにとぞよろしくお願いいたします



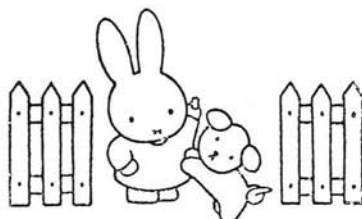
1994年1月1日

〒680

鳥取市本町五丁目三一七番地
県職員住宅四号室

松 田 恭 子

A HAPPY NEW YEAR 1994



今年は2月より1年間 中国へ行
きます。「あごら」に楽しい
たよりを送ろうと思います。

〒273 船橋市印内2-5-22

☎0474-37-0736

芦澤礼子

新
禮
童
歌
昔
天
犬
躍



加賀春

一九九四、二

市健康センターに、ひんすく新念をします。



〒818 筑紫野市二日市〇六九一四
田 辺 幸 子
電話〇九二九三三二五二三番



「春」・大山忠信 画

山田淑子



昨年も住宅難。高家賃で沢山の知人が区外に。他方バブルのつけの坪一億四余の空地は草茫茫。どうなってるのだろう。仕事から他へ移れず。都心に住むのは「闘いだ」。こどもたちとやりあつて毎日気分転換。一緒に住んでいる母もまだ元気。



あけまして
おめでとう
ございます。

今年もどうぞ
よろしく交誼の程
お願い致します。

1994.1.1

こども たちの アロフィール

山田潤子 [10]

毎日、暗くなるまで友だちと遊ぶ。健康そのもの。水泳と習字が得意。夜9時になると「ナイトタイム」と称して、注文をとって、家族みんなにコーヒーや紅茶などを入れてくれる。よく言うことを聞くが「あれもあつたよ」とは兄の言葉。

山田耕史 [15]

もうすぐ高校受験。このごろに及んでいてもいなくてのんきなものでサッカーに夢中。北沢の大ファン。172cmになり、ついに父をおい越した。几帳面な性格の好漢だが、「自分にももう少し厳しければね…」とは陰の声。昔は「トマト耕ちゃん」といわれたが、今はたまきやきやがいがいもが大好物。

山田啓史 [17]

最近の妹との会話。「汚職事件はつかり沢山あって困ったもんだね。」(啓史)。「お食事がいっぱいあってなんで困るの。」(潤子)。今年は高校3年生になる。2年間の、のんびりとしがたが、「ボクもいはいはやる気が出てきたと思ってくれ。」とは本人の弁。「勉強しすぎて体をこわすな」と言っていたいの。

「炎立つ」は津軽の十三湊が舞台のひとつ。その故郷を思つて、昨年、山頭火生誕100周年の自由詠に「津軽は地がきき雀ふんばつて餌を食う」の自信作を応募したが選外に。さて、地方分権確立をめざす今年には「議会は帆、区民は風」と政は船、時代は海である。こころを心に銘じて頑張る決意。

新宿区議会議員

山田敏行

160 東京都新宿区大京町26番地
野口ハウス64号、おひろく34ノ・307X

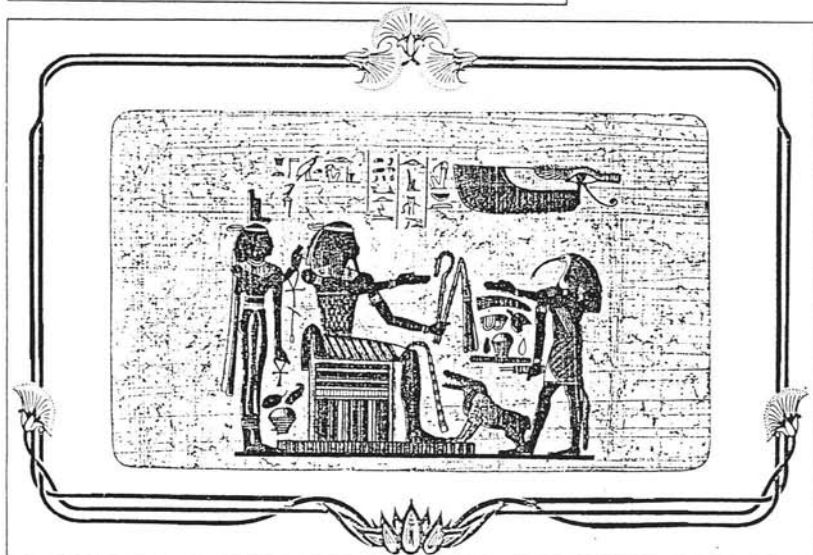


性への、国への、またまた、争い、状況を、
 宇宙時間を見れば、すべて流れていく。

1994
 A Happy
 New Year

a life is like
 a crazy quilt!
 Your Sister

「やがて、この世は、
 すべて流れていく。」
 と、思っています。



おめでとう！と暗れやかに申し上げたいと思ひながら、毎年何やらノドに小骨が刺さったような新年です。

55年体制崩壊、連立内閣成立と、一見、「吉」に向かったように見えながら、見事にすり替えられた政治改革、コメ、自衛隊機派遣、消費税…と問題山積、去年も息のつかない一年でした。

小選挙区制は、腐敗防止法先議案もようやく出て、見通しゼ口の秋に比べれば多少の光が射しかけたましたが、この一月が正念場でしょう。地方議会で腐敗防止法の切離し議決でも続出すればドラスティックな局面展開も可能かと考えたりしています。今年は地方から日本を改革していく年になるのでは……。

各地の情報をお待ちしています。◆二十年間住み慣れた新宿通りの事務局は、十一月末で立退き、

上記に移転しました。ひっそりしたしもたや風で、ちよつとい

いムードですが、交通は四谷三丁目から五分と、すこし不便に代わりに、前の事務所のちょうど真向かいにヘスペースあごらを設けることにしました。からだの勉強会、日本語教授法、フ

エミニスト英語、自立の心理学などのほか、六歳から八十歳までが学べるへあごら塾も開きたいと研究中です。アイディアをどしどしお寄せ下さい。手伝って下さる方、ご連絡を。

こけら落としは下村満子さんの「母を語る」。1月27日(木)6時半から二時間ほど、お夕食を頂きながらリラックスしてお話をうかがいます。食事代込みで二千円。予約三十名です。

◆リサイクルバザーも2月11日12日ヘスペースあごらで。下村さんから早くも出品のお申し

込みが来ています。出品して下さい。おはがきを。

◆恒例の新年号年賀状、10日間で受付けます。掲載料千円、お仕事、ご著書のPRなど、どうぞ。

◆十年間据置き続けた会費に郵便料値上げは大打撃ですが、不況の折、二月末までにお振り込みの方は現行七千二百円のままとします。

何年分でも前払いなら七千二百円ですが、後払いの場合は今は実費(約一万二千円)をご請求しますので、よろしく。

◆図書館や女性会館に購読注文を！年度末に来年度の予算が決まるので、一・二月がチャンス。複数の申し込みがあると、さらに採用率が高くなるようです。

◆へあごらの出発点へBOCはことし満三十年。原点に返って「女性を世に出す仕事」に力をいれます。お知恵とお力を貸してください。ではよい一年を！

去年もたくさんの年賀状をいただきましたが、毎号、原稿があふれ、すみません！ 一年おくれの掲載です！！

（順不同）

〔年頭のメッセージ〕

◆これ以上平和憲法を死に追いやらないため、逆転を夢みてがんばるつきやない。どうぞ今年も元気をください。

（船橋 島田信子）

◆ベトナムの女性グループとのネットワーク創りに力をそそぎたいとねがつております。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

（名古屋 高橋ますみ）

◆元気に新年にがんばろう。

（東京 バーバラ）

◆世相の変移に思うこと、めでたく親

になれば、名門校、よき就職への条件づくりに背水の陣二十年の余やレヤレ。さて四十代半ばからは己が老後生きがいの余生たらむと、才能の向き如何に専心。——いまはむかし、子だくさんの横町住まい、明日に頓着なく「宵越しの金は使はねえ！」と啖呵切つて溜飲下げる。その日暮らしにも充足ありたるらし？ 人の幸せいずれにしても、古稀経たる二人には遅まきながら、近ごろ歳七掛け時代とやらをあてに、もうしばらくねばつてみます。

（桶川 岡田まさ子）

◆二十一周年に向け、今年も賑やかに楽しく大に行動なさってください。

（東京 井田恵子）

◆昨年は本当に日本人をやめたくなるようないやな年でしたが、今年はどうなる年になるのでしょうか。

一人一人の責任重大だと思ってます。

（船橋 白井博子）

◆一九九三年、「女の時代」イコール大正デモクラシーとならないようにしなくては。

私はまず「花の乱」——出版社・新評論にたいする解雇撤回・原職復帰を求める裁判です。地裁・高裁で敗訴ですが、現在、最高裁に上告中。

新評論において私に即日解雇を申し渡した藤原良雄氏（現藤原書店社長）が脚光を浴びている今、「花の乱」も目立たせなくてはね。

（東京 片岡陽子）

◆国内外とも移り変わりのはげしさに少々戸惑いながら、政治不信がさらに強まるばかりです。どうぞお元気で。

（和歌山 山本まさ子）

◆今を変え、明日を創るため皆様の声

を生かしてまいります。

(東京 外口玉子)

◆本当におめでとう！ つて言える年にしたいし、そういう私でありたいとは思っているのですが……。

間もなく一年間のモラトリアム期(？)充電(？)の季節が終わります。稼いで食べつつ、やらなきゃ！と思うことにしつかり取り組んでいけたらいいな、と思っております。

(横浜 池谷まゆみ)

◆北風に負けず今年も頑張ります。

(那覇 安里成治)

◆差別のない社会めざし、今年もリブ運動にがんばります。元慰安婦を特集した「おんなの叛逆」40号が昨年未出来ました。

希望と飛躍の年になりますよう。

ご活躍ご発展を期待しております。

(名古屋 久野綾子)

◆今年の政局、どうなることかと思っ

ています。護憲にこだわって、したたかに行動したいと思います。

(広島 栗原君子)

◆凍える冬空を忘れそうなお正月です。

気持ちよく自分の生き方を切り開いて生きる女たちの中にいて、さらに身軽になつていけそうな気がしています。今年は何をお互いの中に積み重ねられるでしょうか。楽しみです。

(東京 丹羽雅代)

◆政治腐敗が極致にあり、混沌する政治状況の中、腰を据えて新しい政治の創造のために力いっぱい働きたいと決意を新たにしているところです。

(札幌 伊東秀子)

◆自然分娩の方法は、ヨガ・氣功・イメジェリー・ソフロロジー・水中出産と多彩になりましたが、つまる所は一つ、産む人・周囲の人、皆満足のお産で生き生きした赤ちゃんを迎える

ことと存じます。

一九九一年に「へお産の学校」で開催したパネルディスカッションは、「へいお産を考える会」と合同で、日本助産学会学術集会のプレコンGRES・ミーンティングとして定着することになりました。今年のテーマは「よりよい娩出期のケア」で、三月六日に北九州市で行います。少人数に分かれて話し合うやり方で、昨秋来日されたオタン博士の娩出反射など好個の話題かと存じます。こ来駕をお待ちしております。

(東京 杉山次子)

◆92年は、ウラジオストク市女性会議訪問、全国女性史研究交流のついでで沖縄へと、新しい体験と刺激を受け、二年目を迎えた「女性センター」の市川房枝生誕一〇〇年展は、感慨深いものがありました。

しかし昨年は、政治にがつかりした一年でした。新潟は、またしても「有

名」になつてしまいました。まだまだ女性のパワーが不足しているというところででしょうか。

93年、やはり新潟女性史と女性センターのことを考えていきたいと思ひます。

(新潟 倉元正子)

◆ご活躍を、いつも感激しながら読ませていただいております。

(東京 石川由紀)

◆「冠婚葬祭とフェミニズム」特集、とても面白かったです。これからも時宜を得た特集を期待しています。

〈あこら〉がんばれ！

(佐倉 山本良子)

◆今年は、なんといっても第一の課題は、政治改革でしょうが、司法改革も劣らず重大な課題です。裁判離れ、弁護士離れの風潮は久しいが、民主国家として、法治国家としての根幹であり、安定した平和で希望ある生活の基盤の問題だからです。

国民の番犬である弁護士は、迅速で金のかからない、役に立つ裁判で、しかも適正な結論の得られるものに改善しようと、やつきになつて年に数回、千人もの者が集まつて討議しています。

しかし、一般の関心はいま一つと思われまふ。九二年十一月の福岡におけるシンポジウムも、千人以上の弁護士が全国から集まつて、ムンムンする熱気で議論したのですが、一般には伝わっていないとは思えない反応です。一地方の問題で、弁護士さんのお祭り騒ぎのように受け取られているとは思いません。

政治改革にしても、司法改革にしても、直接これらの業務に携わっている者たちに、その改革は委せておくべきではないと思われまふ。それは金丸事件において、政治家自身の作つた規制を見ても、また司法改革においても、

従来何十回となく訴訟促進案が作られ実行を試みられたのですが、いずれも失敗しているのは、担当者自身の行動を規制し、自分たちの尻をひつぱりたいで政令するような仕組みですから、結局出来上がったものは骨抜きになつていくからと思います。

そこで、改革案を検討するのはどうしても部外者からの検討が重要で、一般国民の関心と問題解決への参画なくしては、成功しないと思われる次第で、そのもり上がりをも喚起することが、今年の最も大きな我々のつとめではないかと思ひます。

私も相変わらず健康で、予防医学を最大限に掛け、弁護士としての責務を果たすべく頑張るつもりですので、よろしく御指導下さい。

(東京 下光軍二)

◆私は昨年、予算、環境、労働の委員会でも働かせていただきました。予算

委では、いままで放置してきた戦争の加害責任、とくに慰安婦問題を取りあげ、政府に謝罪と補償を要求。また韓国、北朝鮮、中国、台湾、香港、フィリピンの被害者の実情を調査してきました。

道義なき日本に対するアジアの目は厳しく、今年は国連人権委員会できりあげられます。自らの過ちを自らの手で解決するために、私は国会で謝罪決議と戦後補償調査委員会設置のために努力します。

森林の環境保全、そして良質な水資源確保と環境基本法・環境アセスメントづくりが重点です。

さらに労働時間の短縮、介護労働者の福祉、短期間就労労働者の社会保険加入を獲得。

今年はパート労働法と労働基準法改正が山を迎えます。

コメの自由化に反対、所得減税、0

DAの見直し、そして保育所や子育て支援政策の拡充、年金など女性政策へのテコ入れ。

しかし国会は、市民社会とは異質なところ。非民主的で、官僚主義と数の論理の横行に悩まされています。

「蟻の一穴」と危惧した自衛隊の海外派兵は、相次ぐ国連のシナリオの変質で重武装の緊急展開部隊導入、憲法九条が危うくなってきました。

カネ、右翼、暴力団とからんだ政治権力を「普通人のモラル」にと、懸命に努力していますが、政治改革の最大の力は国民の世論です。どうぞ今後も限りないご支援をお願いいたします。

(大宮 清水澄子)

◆激動の92年も過ぎ、今年も何変わることなく、社会は不快な問題を引きずりながら新しい年を迎えました。

身体の中を駆け巡るエネルギーや思いを出しきれない毎日ですが、私流の

ケセラセラで何とかやっています。

(堺 大森英子)

◆「四柱推命講座(1)」を上梓しました。今年は七赤金星中宮の年です。経済・金融解決など金運に大きなゆさぶりをかけられる年となるでしょう。

(東京 榎 玉淑)

◆九二年は「佐川」の幕引きを画策する男たちの狼芝居で暮れました。世界はサツチャー、レーガンからの保守政権下で貧富の格差が増大、中産階級の生活水準が悪化し、八〇年代をみすみす無駄に費やしてしまったことがはつきり見えてきたと指摘されています。

同時代をロッキード、リクルート、

佐川で費やした私たち。佐川では「大山鳴動鼠一匹」。大騒ぎの帰結を「小選挙区制」にすり替えようと、亡国の男たちが暗躍しています。

一方、高水準の福祉を着々と実現

して世界の熱い視線を集めている北歐諸国。完全比例代表制のノルウェーはQUOTA制で比例代表名簿の順位が男女交互となるため、議員も大臣も四割以上が女性という事実！ 子どもたちに丸刈りや制服を強要する、国際化、情報化にとり残された化石男たちがのさばる国とは大違いです。

未来は男の野蛮な競争ではなく、平等をめざす福祉社会にあり！ はばたこうぜ、女たち！ のさばるヒビジジイどもを蹴飛ばし蹴飛ばし一掃できたら、どんなに気分がいいだろう！

(松山 清野初美)

◆いつもご無沙汰をしておりますが、へあこら」が健在であることは、私に“生”へのエッセンスを与えてくれている存在として在ります。

今年は人生の暗闇から抜け出る最初の年になるような気がしています。

(東京 須藤昌子)

◆昨年はあこら二十周年の集いに伺わせていただき、ほんとうにありがとうございます。斎藤さんにお会いするきっかけを与えてくれた「市民の学校実行委員会」が、昨年暮れ、解散してしまいました。新しい一歩を踏み出す年でありたいと願っています。

(神奈川 松浦美世)

◆こんな日本の政治の状況の中で「あこら」のペンの力に期待しています。

(東京 関 京子)

◆旧年は自宅と事務所の移転、「芳泉企画」の創立十周年、そして「夕陽丘女性史グループ」を中心とする学習活動、と、きわめて多忙な一年でした。

今年のはのんびりと仕事と家事を適当にこなし、余暇を十分につくり自分自身を見つめ直したいと思っています。

(大阪 澤田和子)

◆昨年九月の「みちのくシンポジウ

ム」は、お蔭さまで無事に終えることができました。その後各地域で波及的效果がさまざまな形で現れつつあります。

私たちもさらに地域に根ざした活動が続けてまいりたいと存じます。

(仙台 福永隆子)

◆あこらの活動ストツプしたままで心苦しく思っています。今年は再開したいと思っているのですが……。

(草加 池田千鶴)

◆二十周年の会、たいへん感動しました。お身体に十分ご留意ください。

(東京 西海千恵子)

◆さまざまなご体験を乗り越えて、新しい道を切り開いてゆかれるお姿に、感動を覚えずにはいられません。どうぞお大事になさって、世の中への警鐘を鳴らせてくださいますことをお待ち申し上げます。

私は暮れからバリに行っております

て五日に帰りました。古い歴史的なものをそこなうことなく未来に向けて開かれていくパリを見てまいりました。

(東京 栗原陽子)

◆やつと七十三歳の新春を迎えることができました。天地の恵みと人様のおみちびきに深い感謝を捧げます。

今年こそ平和な世界の実現を、そして貴方様がお幸せに過ごされますようにと心から祈っています。

〈あごろ〉のエネルギーと、すばらしい智と愛に心から敬服しています。

(筑紫野 田辺幸子)

◆為了極救世界人類

不要発出一點病果 (毛沢東)

パレスチナの音楽をききにいました。

フィリピン・サンチョさんの話をききました。フィリピンでも湾岸戦争の時、アメリカ軍のために多くのフィリピン女性が強姦や殺害にあつ

たそうです。

ソマリア・ユーゴ・湾岸戦争は、現代の問題です。帝国主義がつづくかぎり戦争がおこされます。

(東京 芳村光輝)

◆一九九三年国際先住民年の今年、水俣は一次訴訟判決から二〇周年を迎えます。昨年は六月、「私たちの階級会議」に二風谷のアイヌ資料館長萱野茂さんにご参加いただき、アイヌ民族の歴史とともに、その自然観を学ぶことができました。

「環境ブーム」の言葉と裏腹に新幹線、高速道路建設、子守歌の里五木を水没させる川辺ダム等、水俣近郊でも自然破壊がますます進行しています。「3月20日判決20周年」を機に、水俣の教訓をあらためて問い直し、先住民から、アジアから、奪い取ることで成り立ってきた文明に代わる新しい価値と文化を生み出す年にした

いものです。新年をカンボジアで迎え、5日に帰国しました。

(熊本 谷洋一)

◆久々に市民の方々と開いた憲法集会に始まり、PKO法反対、内田選挙、ブルトニウム変換問題など、目まぐるしい一年でした。今年もブルトニウム輸送船「あかつき丸」を迎えて、新年早々東海村に馳せ参じることにしようです。

今年も厳しい年になりそうですね。各々が各々の場で頑張っていくしかないと思っております。皆様方のご多幸をお祈りしつつ、私は内面の充実を図っていきたくと願っております。

(東京 大貫淑子)

◆世界そうせん。みんな何か大切なものを金に換えてしまい尊厳を失っている中、あごろにはぜひとも頑張ってください！

(東京 ダグラス・ラミス 斎藤耶寿古)

◆多様な主張が存在する時代。この時代に生きることを楽しみ、人類史に残る先達に学び、探究を続けたい。だから、残る時間が、とても、大切。

こんな気持ちで暮らしています。

(飯能 柴崎和恵)

◆〈あこら〉のおかげでこれからの人生、学ぶ場を見つけ、うれしく思っております。

人生最後の時まで学び続けたい。

(船橋 川崎みどり)

◆個人(ひとり)の力は、つよいのか、ヨワイのか、ことしは試されるような予感がします。映画 JFK をみると、「表現」できることもけっこうあるのね、と、うれしくなります。

(国分寺 田井亮子)

◆94の家庭科男女共修、全国的にきちんと出発できるよう、日々過ごしています。教育の中の男女平等の一步のために。

(調布 芦谷かおる)

◆変革へ向けて！

(西宮 川名紀美)

◆明るさと やさしさと

人と人のつながりを心がけ

一步一步あゆみます

(東京 池田芳江)

◆今の政治を変えるには、女性の力が必要だと思えます。〈あこら〉で優秀な女性を育てて、国会に送り込むことを期待いたします。

(埼玉 外山朝子)

◆めんどりが時を告げる

コツコツコツ

おんどりが時を告げる

コケコツコ

雄鳥も雌鳥も鳴かなければ

美しい朝は来ない

(尾西 浅野美和子)

◆ことしも夢追い人でまいます。

(福岡 森崎民子)

◆今年も世界はあちこちで火山の爆発

のようにゆれ動きそうです。車輪の片側(精神文明)の進歩は望めないことでしょうか。

(東京 天野洋子)

◆豊かなお正月をすべての人々へ。豊かで優雅なお正月を誰でもが迎えられるてよいはずです。そのためにも、

① 真に平和で差別のない自由な社会であること

・ 非武装中立の日本を！(脱原発・非武装・不戦・非核・護憲)“改”憲も・反安保・反基地)

・ 良心の囚人の釈放、すべての政治囚に公正で速やかな裁判、すべての囚人への「拷問・死刑」の廃止を！

・ 反アパルトヘイト、指紋押捺の廃止、反女男差別、反部落差別、反「障害者」差別。いらんぜよ天皇制。

② 搾取がない社会であること

・ ひたいに汗して働く者が主人公である社会を！

・ ゴミ・エネルギー・資源を考えたら

計画経済を！

等が、とりあえずの最低条件です。そんな社会を目指して着実に学び、そして今の社会・生活のあり方を見直し、実践行動する一年にします。

「地球規模で考え」「足元で実践」に挑戦！

・今「平成」維新の時

元号は使いたくないし、さらには大前研一呼びかけの「平成維新の会」とネーミングがダブルなのですが……。坂本竜馬らが、新しい社会を志して命をかけた幕末同様な激動の社会を生きていく僕たちは、何を、今なすべきか。

戦後40年近い自民党政権も、佐川に象徴されるごとく、金権腐敗が表に出て揺らいでいる。だが、取って代わる受け皿となるべき社会党は、もつと危機的状況である。現実主義の名の下に、社会党の原則が投げ捨てられつつある(安保・自衛隊・原発の容認。そ

こで労研センター等の呼びかけで「平和運動と地域共闘の前進を目指す全国連絡会」を組織し、「護憲」の旗を「守る」結果軸となります。

・足元で何をやるのか。

去年結成した「人間ばんざい交流会」で、①ミニコミ紙の発行②演劇の主催③人間ばんざい祭りの実施を計画。当面は、2月末の公演成功に向けて事務局としてかわります。

・日本の国歌は「君が代」でなし

日本の国旗は「日の丸」でなし
そこで提案、♡をシンボルに！

(山形・尾花沢 菅野真治)

◆大学一年の秋に(あこら)とめぐり会ってから、早や十五年……。保守的な医者の世界、中でも特にマッチョな価値観がまだまだまかり通る「精神科業界」ですが、フェミニズムという生き方の芯だけは曲げずに、より良い癒し手を目指したいと思います。

(札幌 小松ともみ)

◆おっとりとしつとりと

いきたいけれど

やっぱりバタバタした年に

なりそうな……



(福岡 石原豊子)

◆世界のあちこちから落ち着かないニユースばかり聞こえてきますが、こんな時こそ真物の光る時。ご健康に留意されて、ご活躍ください。

(東京 緑川仁子)

◆「彼らの言葉」——「我らの言葉」

「押しつけ憲法」——「あの時あなたも新鮮な感動で受け入れましたね」

「核アレルギー」——「アレルギーの

逆は不感症ですね」

「土下座外交」——「あの植民地支配

の謝罪が土下座ぐらいで済むものでしょうか」

「二国平和主義」——「自分だけは戦争に加担しない、武器を供与しない、

という国ばかりになればいいんじゃない？ 市民が銃を持つ国アメリカさん、どうですか」

「平和ボケ」——「正義の戦争よりも不正義の平和のほうがいいよ。たとえ佐川事件ほどのことでも取り返しがつくから」

(出水 友田良子)

◆バイタリティーは斎藤さんの足元に及びませんが、確かな目で前進すべく今年も考えています。

年末年始、ヴェトナム・カンボジアに行ってきました。アジアの環境問題を共有するため私たちに何ができるか、宿題をたくさんもらった旅です。

(守山 藤井絢子)

◆社会の変動がはげしい近年ですが、きちんと眼をあけて見えています。

ご活躍を。(東京 平岡美智子)

◆本年も年明けからブルトニウムとか大変な年になりそうですが、皆様のご多幸とご健康を心より祈り上げます。

(東京 戸井田宗二郎)
◆日ごろ誠実なよいお仕事をされていることに敬意を表します。

この三月、私は七十三歳になりますが、「与生」を充実して生きたいと念じています。

与えられ与える生や初祈り

(福岡 秋枝蕭子)

◆「コロンブス五百年」を経たことは世界先住民族年です。新しい世紀、新しい世界に向けて、先住民族の言葉をいくつかお届けします。

「先住民は、時間が始まる前の時間から、ここにいつづけている。われわれは、創造者に直接由来している。われわれは最初の日の地球のままだに、地球を維持し、生きてきた」(「カリオカ宣言」一九九二年五月、ブラジル)
「開発という概念は、これまでわれらの土地の破壊を意味してきた」(同右)
「われわれはここに、われわれが世

界の熱帯林を守る文化の担い手、森林の本来の所有者であることを宣言する」(「熱帯林先住民族憲章」一九九二年二月、マレーシア)

(東京 西川潤)

◆どうぞ心安らかに、よいお仕事をされますよう祈っています。

(東京 佐藤禮子)

◆「あごろ」が貴花田、つていうのはいいですね。私の住んでいる中野は、近くに藤島部屋がありますので、よけいうれしいかんじ……。

(東京 米津知子)

◆昨夏、参議院選に際しましてはたいへんお世話様でした。

旧い友人との再会と新しい友人との出会いがありました。もしかすると、「青春再び」というような浮ついた側面もあつたかもしれません。

しかし、市民運動の一環としての選挙であり、その掲げた課題が実現して

いない以上、

自衛隊の海外派兵反対！

戦後補償を実現し道義ある国に！

の旗を降ろすわけにはまいりません。

また、いろいろな場面でお会いでき

ましたらと思っています。

四月から中国です。

(東京 内田雅俊・美代子)

◆過ぎていく時が「いま」に映り

未来を垣間見ながら

白いページをめくります

二十歳プラスαの、ご健康で新鮮な

年になりますように。

「自立の心理学Ⅱ」の年にしたいも

のです。いま、文体というクセモノを

考え始めました。

(東京 しま・ようこ)

◆高齢化社会もいろいろな問題を残し

つつ、在宅介護がベターであるという

方向で動いております。これを私たち

が望むような在宅介護にするには、あ

たりまえの暮らしって何だろう、と考
えることが始まりのような気がします。

「あたりまえ」ってどういうこと？

——今年の課題です。

(浦和 深田範子)

◆「労働なき富」はいかに集積しても

バブル経済に過ぎず、政治はインモラ

ル集団の場と化し民意との乖離目を

覆う日本。

一方国外に視野を開けばアメリカの

若い息吹きの可能性がまぶしく、EC

の真摯な取り組みは国境なき世界への

模索を思う。

ソマリアの飢餓はこの世のものと思

えず悲しく、民族紛争の戦火はいつ果

てるのか、胸が痛みます。

そんな中でも私は無事越年、はじめ

て”の六十七歳を心あらたに独婦連

とホームヘルプ活動に生命を燃やしま

す。

(藤沢 大久保さわ子)

◆バベルの塔崩壊の神話は社会主義経

済の行き詰まりやバブル経済の崩壊を
暗示し、さらには物質文明の限界をも
示唆しているのではないだろうか。

その虚構に挑戦する社会的エネルギー

ーを、人間性を涵養し発揚させる社会

の構築に転換できれば、二十一世紀に

生活する孫たちや娘夫婦たちは貴重な

生命を授かった喜びを素直に感謝でき

るでしょう。真の人間性を探究し、人

間性機軸社会の構築に価値ある一年

でありたいと思います。

(東京 金田絢子)

◆世界各国で政治の流れに新しい変化

が起こっています。わが国でも政治の

刷新を実現しなければなりません。

二十一世紀に向けて、清潔な政治

を実現すること、日本国憲法の精神を

生かし掲げること、高齢化社会に安心

して暮らすことのできる、真に豊かな

福祉社会を創造することに、全力でと

りくむ決意です。

私は日ごろから「人間のぬくもりを大切にする政治家でありたい」と願っています。政治家が市民のみなさんの対話から学び、確かな道を勇氣をもつて共に歩むことが今ほど求められているのではないと確信しています。

わかりやすい政治を実現すること、政権交代を実現すること、確かな手こたえのある開かれた政治を確立することに全力で取り組んでまいります。

「自分で省みて正しいと思えば、どんな困難があつても、ひるまずにこれをやり通すこと」を、この一年間の信条とすることを誓います。

(東京 鈴木喜久子)

◆七十年と三か月、体のあちこちに故障が始まりましたが、それも老いの幸せの一つと感謝しております。

九二年、たくさんすばらしい方々との出会いがありました。奈良でも強制連行従軍慰安婦の一一〇番が開設

され、このことに関して私の無知を思い知らされる日々でした。私の代わり连接到行かれた朝鮮人女性、再び故郷に帰ることのなかったその方々の恨みを、今年の私の生き方の中心にしたいと思います。教え子たちと一緒に、再度の独立記念館参観も今年の私の生き方の課題の一つです。ハングルはまだ全然駄目ですが……。無知は大きな罪ですものね。

旧ユーゴやソマリアをはじめとする世界各地の悲しいニュースに、私たちの生活が無縁ではないことを思います。シベリアの森林伐採、カンボジアの物価高騰等、その地に住む方々と手を繋ぎたいことです。世界の不況に、一九二九年当時の恐慌を思い出してます。

老いて知った幸せの数々、皆様のおかげと感謝しつつ、世界の誰もが老いまで生きてほしいと思うのです。

(奈良 池田正枝)

◆昨日は突然の大地震にびっくりし、十六年前の宮城沖地震のことを思い出しております。被害者の方たちの無事と、一日も早く平和をとり戻されることを祈るのみです。天災はこわいものです。戦争は人の心がけ次第で避けられますが、神さまのなさることは私どもへの啓示なのでしょうね。

今年も平和に向けて、六十五歳の一年、何ができるでしょうか？ 前向きに歩んでまいりたいと思っております。

(日野 斎藤安子)

◆〈あこら九州〉も、日本初のセクシヤルハラスメント裁判勝利の一翼を担えました。(福岡 あこら九州)

◆昨年は〈あこら沖縄〉編集(?)第一号「沖縄から発信」が発行できて喜んでおります。

組織としてはあまり動いていませんが、本屋さんを回ったり、図書館に置

いてもらったり、組合の大会等で販売したりして、「あこら」を一人でも多くの人に読んでもらおうとがんばっています。

「あこら」と向き合うことで、問題意識を持つ習慣が出来ます。今年も全国の皆様、ヨロシクネ！

(那覇 あこら沖縄)

◆継続は力なり

ゆつたりマイペースで17年目！

(札幌 あこら札幌)

◆いま「イブの隠れた顔」を読んでいます。いたいたしさ、いたましさのまじった戸惑いの中の怒りを禁じ得ません。単にアラブの問題ではない、根っこが見えてくる気がします。

学べば学ぶほど、悲しみも増してしまふのですが、そこを通り抜けなくては「自分の生きたい道」には通じていない気がして、勉強の楽しさは捨てられません。気負いだけで疲れている自

分を卒業したいと、今年は、
"Full of Pleasure, not Pressure"でゆきたいです。

(愛媛 あこら松山)

◆アジアと連帯を深め、世界の平和を願い、今年もネットワークをさらにひろげていきましょう！

(東京 婦人民主クラブ)

◆オープンして一年四か月たちました。女同士、こころからだについて学び、支え合い、育ち合う場をめざします。今年も地に足つけて、やっています。

(ウイメンズセンター岡山準備会)

◆〈結の家〉は、この夏の完成をめざして着工することになりました。今年には沖縄でお会いしましょう。

(那覇歴史をひらく結の家島本幸子)

◆昨年、結成三十周年を迎えることができました。自衛隊の海外派遣、佐川事件など、平和と民主主義、人権と

いう憲法の柱が腐り、崩れかかっているいま、結成時の基本に立ち返って、平和と女性解放、政治改革実現のために全力をあげる決意でございます。

とりわけ、元従軍慰安婦をはじめとする、日本の軍国主義の犠牲となったアジアの人々への謝罪と戦後補償を果たさせ、世界に対して恥ずかしくない日本をつくり出すために、力を尽くしてまいりたいと存じます。

(東京 日本婦人会議中央本部)

◆昨年の暮れ、ようやく「資料日本ウーマン・リブ史」の第一巻が完成し、発刊にこぎつけることができました。今年は第二巻・第三巻の発行をめざして一同がんばりたいと思っています。

(京都 松香堂書店)

◆一九九三年、世界はいよいよ「大乱」の時代に入っているようです。激動の中でしっかりと針路をとっていきたいと思います。昨年、侵略の軍隊を

ついに出兵した日本。アジアでは「軍国日本の復活」に怒りとたたきたいがひろがっています。

私たちは、このアジアの民衆に何としても応えて、今年こそ力を尽くして侵略をやめさせるためにがんばります。

(婦人民主クラブ全国協議会)

神奈川県相模原市支部

◆ 昨年は激動の中、新しい出発をしようとしているチェコスロバキア、発展途上のマレーシアなどへ本会の海外派遣を実施し、新しい情報を得、視野を広げました。

会員一同新しい飛躍をめざして、今年も世界各地の女性たちと手を携えて、視察研修・調査、国際交流、地域セミナーなどを通じて、地域と、世界をつなぐネットワークの形成に努力致したいと念願しております。

(東京 国際婦人教育振興会)

◆ 開館一周年を迎えた昨年は、一〇

万人余の参観がありました。

「戦争の悲惨さと平和の尊さを次の世代に伝える施設として、多くの方々の参観を得たいと存じます。」

(大阪ビースおおさか)

大阪国際平和センター

◆ 今年には市川房枝先生生誕百年を五月十五日に迎えます。心を新たにし、同盟創立の理念に立ち、選挙と政治の浄化を実現し、日本国憲法のもと、福祉と平和の社会を築くため全力を挙げます。

(東京 日本婦人有権者同盟)

◆ 女と男の間柄、子育て、老い、環境問題など、今年もさまざまな投稿が寄せられることでしょう。

読者とともに育つ投稿誌「わいふ」より充実した誌面を作っていくつもりです。

(東京 グループわいふ)

◆ 「へあくら」のエネルギ―！ 見習います！

(東京 田中喜美子)

◆ 本年も婦人教育・家庭教育の振興および家庭科学研究所の事業推進に努力してまいりたいと思いますので、一層のご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。

(東京 日本女子社会教育会)

◆ 本年も男女雇用機会均等対策をはじめとして婦人行政の充実へ向け、婦人政策課職員一同邁進してゆく所存でございます。

(東京 岩田喜美枝)

労働省婦人局婦人政策課長)

◆ 国際化が一段と進むなか、私たちはこれまでどおり、地域を基盤として、誰もが安心して暮らせる社会の形成をめざして、学習と実践を重ねてまいりたいと存じます。

(東京 全国地域婦人団体連絡協議会)

◆ 昨年は国際協同組合同盟(ICA)大会が東京で開催され、海外から八二か国一一〇〇名、日本を含め一三〇

○名の参加により大成功裡に終了致しました。国際的にも注目されている、日本の生協運動の更なる発展を目指し、一同全力で取り組む所存であります。

（東京 日本生活協同組合連合会）
◆一人一人の命が尊ばれる世界となるために、平和と人権が守られ、地球環境が回復するよう一層の努力を続けていきたいと存じます。
なお新会館建築は順調に進んでおり、四月に竣工の予定です。

（東京 日本キリスト教女子青年会）
◆昨年末に当連合は生協法人格を取得し、名称を改めたうえ、一層の飛翔を期しています。

（福岡 生活協同組合連合会）
グリーンコープ事業連合
◆皆様のお蔭をもちまして、横浜女性フォーラムは開館五年目を迎えることができました。さらに本年夏には二館

目の施設「フォーラムよこはま」（仮称）が横浜みなとみらい地区に開館する運びとなりました。今後は両館の連携により、よりよい施設運営、事業展開をめざして、職員一同、一層の努力をしてまいります。ご支援、ご指導を心よりお願い申し上げます。

（横浜 横浜女性フォーラム）
◆当会館では開館以来十五年の経過を節目としまして、新たな出発の年として、諸事業の充実・強化を図ってみたいと存じます。
本年も変わらぬ御支援をいただきま

すようよろしくお願い申し上げます。

（埼玉 国立婦人教育会館）
◆年末から正月にかけて電話も来客もシャットアウトしてほとんど一人で過ごした。最小限の食べ物と酒を用意して、積んでおいた本やビデオを気儘に楽しむ。「浦霞」をコップで飲みながら一日かかって読破した船戸与一の

「砂のクロニクル」が最高に面白かった。ビデオは「トト・ザ・ヒーロー」がなかなか。休みが明けて会った友人たちにそんな話をしたら、何人もがおんなじものを読んだり見たりしていたので笑ってしまつた。

昨年は「赤かぶ弁当」の土台を固めるのに勢力を傾けていたので、どうしても内向けの活動が多かった。プロイラーみたいになかぶ屋の中を動き回り、自分でも身体が重くなつた気がする。

というわけで、今年はどんな外に出て「赤かぶ」にもいろんな空気を吹き込みたいと思う。

「赤かぶニュース」は極めて私的な行動や思いを率直に語ることを身上としているが、地域の動きや赤かぶ周辺での活動もきちんと伝えていきたい。「赤かぶ弁当」は経営基盤をしつかりと固めて、企業組合として法人化を

目指す。

「としまユニオン」は相談活動に力を入れて、定期的な講座にも取り組みたい。「日本語学校」や「外国語講座」も計画中。（東京 酒井和子）

◆千里に雪ひるがえり

万里に驚雷とどろけは

大河の上下たちまち滔々たるを失う
時代の激動の中 四十年の総括を踏まえ 歴史を創造する真の英雄を描きだす仕事に今年も邁進する決意です。
今年公演「亡国の構図」「南の島から」「砦」・合唱「地底の歌」「世界の歌」（創作曲）

（山口 劇団はぐるま座）

◆戦争も搾取も貧困もない新しい社会めざして、ことしも歩みつつけます。

（東京婦人解放新聞東京社 井上牧）

◆23回目の新年を迎えることができました。この間のロシナンテ号の歩みは、日本そして世界という場から考え

るならば実にささやかな営みであつたかと思ひます。しかし、日常を基盤として発言する人々の声を少しづつ紡いできた、という自負のようなものはあります。93年がどんな年になるか、一歩一歩前進していこうと思ひます。ロシナンテ社はまだまだ成長しようと考えています。変わらぬご支援・ご叱責を！

（京都 ロシナンテ社）

◆今年こそは、今一度ゆつくり「みるくうゆ」を創つていくことを考えたいと思つています。

（徳島 Booksみるくうゆ）

〔近況報告を兼ねて〕

◆昨年は「朝日ジャーナル」の休刊という思いがけないドラマを体験し、私にとつてはたいへん劇的な年になりました。休刊に納得できず、部員と共に断乎抵抗したり、上層部と激論をたた

かわしたり…消耗もしましたけれど、学生気分に戻つたような妙な元氣が出て、面白い数カ月でした。ただ残念ながら力及ばず、「ジャーナル」を応援していただく方々には、本当に申しわけなく思つております。

ところで私こと、昨年七月末で「朝日ジャーナル」編集長としての責務を終え、八月から朝日新聞編集委員として仕事をしております。また、「朝日ジャーナル」が二年にわたり実施してまいりました「企業の社会貢献度調査」につきましては、朝日新聞文化財団のなかに企業社会貢献度調査委員会を設け、今後も続けていくことになり、これまでのかわりもあつて、当分私が委員長を務めることになりました。

（東京 下村満子）

◆三年来、息子も娘も私をかまおうとしなくなり、愛する孫にも会えず、寂しくて辛いですから、去る九月にまた

桂林に來ました。この友誼學校（仕事の余暇に通う學校）で教鞭をとつています。午前のクラスも夜のクラスもあり、週に20時間の講義を担当しています。古稀の年には過負担でしょうが、それほど疲れません。朝六時半から一時間ぐらゐの鍛錬を日課にしている甲斐があるのかと思います。忙しいから、知らず知らずの間に月日が流れていきます。

桂林にいる妹の家に行つたら、一九九一年六月十日発行の「あこら」一六四号を出してくれました。私より十歳も下の妹ですが、もう頭がぼけたよう、何冊届いたかも覚えておらず、転送もしてくれなかつたのです。私はいへん腹を立てたが仕方がありません。

仕事の合間に「ピースビルグリーム」を拝読して、斎藤さんの活躍ぶりに頭が下がります。本当に勇氣のある

方。よくもあの戦乱の地を歩き回つて取材なさつた。偉いです、たいしたものです、と感心しています。あの新華社の記者陳さんは日本語のわからない人らしいですね。話の意味が通じたようですが。

さて森村誠一の「悪魔の飽食」（これは中国語訳の書名ですが）が十年以上前に中国語に訳され、初めて七三一部隊のことが世に知られたそうです。先月、その罪状の展覽会を桂林市で開くことを新聞で知り、見に行つたのですが、見るにしのびず、説明書を二枚もらつて帰りました。

二年前にいただいたお手紙に、侵略史料があれば、とご要望があり、一度本屋へ行つてみたのですがなかつたので、ほつておいて、すまなく思つております。早速この説明書を同封します。訳してもいいですが、つい仕事や雑用に追われて延び延びになつてしま

いました。手もとにもう一枚ありますから、お役に立つなら、できるだけのことはさせていただきます。

先月、知人から瀬戸内寂聴様の「寂聴説法」を借りて来て読みました。頼るべき者もない私も観音様を信じるようになり、心を静めました。

同封した観音様のお守り、どうか御身につけて下さい。私は裏の神呪を朝晩拝誦しています。

（中華人民共和国 袁 晞）

◆九二年秋は、まるひと月かけて中国の砂漠八〇〇キロを、らくだで旅しました。夫を喪つた後、独りで生きる力を自分の中に持つために決意したのですが、旅は期待を何層倍も上回るものでした。新しいテーマが幾つも生まれ、人生の最終楽章をどう奏でるか、その道が見えてきました。今年は、その事始めにしたいと願っています。

（調布 半田たつ子）

◆九二年は「地球サミット」に向けて
明け、リオまでは生態系を守る「生物
多様性条約」に取組み、6月以降は
国内に目を転じ、フナ林やクロウサギ
の心配をしながら年の瀬を迎えまし
た。

もう一つ心配なのは「学校に行きた
くない」という子どもが増えているこ
と。心痛みます。だから、豊かで多様
な自然と文化、平和で自由な社会をつ
くるために私は働かなければ、と心に
決めております。

精いつばい、私を使っていたくださ
い、また、それが可能になるよう支え
ていただきたい、と願っております。

(東京 堂本暁子)

◆昨年は、七月の参議院選挙で大変
な思いをいたしました、おかげ様で
三回目の当選をすることができまし
た。

また十二月には、はからずも文部大

臣の大役を拝命いたし、ひとえに皆様
のご声援のたまものと深く感謝申し上
げます。ご期待にそむかぬよう、せい
つばいがんばりたいと思いますので
いつそうのご鞭撻をお願いいたします。

(東京 森山真弓)

◆私はここ数年、年末年始は京都か奈
良で過ごすようになりました。今年も
奈良に行つて、飛鳥や柳生の里を歩い
てきました。

日本人が何世紀にもわたつて誇りに
してきた土地が、ここ数年の間に住宅
開発の波にさらされていくのを見るの
は何とも残念な気がいたします。

(東京 林 陽子)

◆昨年は、娘はヨルダン・パレスチナ
一か月、息子はオーストラリア三週
間、私は二度目のイラクへと出かけて
きました。また、夫は職場や地域で、
アジアの人々の過去や現在と出会う映
画会を続けてきました。そしてそれぞ

れに、地球の小ささと、平和のかけが
えのなさを痛感した一年でした。

地球上の命の重さの等しさを、しつ
かりと胸に抱えて、今年も歩き続け
たいと思っております。

(東京 伊藤政子)

◆私にとつて一九九二年はコーディネ
ーター役を務めた「アジア女性会
議」に明け暮れた一年でした。

でも、それはパワーにあふれた、そ
して心やさしい多くの女性とわずかの
すてきな男性との出会いによる感動の
一年でした。生きることの喜びをかみ
しめた一年を過ごすことができたこと
を心より皆さまに感謝申し上げます。

一九九三年、私は新たなスタートに際
し、日々スリランカ、ビルマ、フィリ
ピンなどの在日の友人とふれあいな
がら、今後一層アジア・人権問題にこだ
わつていくつもりです。

(松戸 船橋邦子)

◆タイから元気に帰ってきました。屋台での食事などで身体も大丈夫。顔もさほど変わらないので、タンクトップに短パンなどという真夏の格好さえしなればタイ人として通用しそうです（タイは冬なので、おしやれさんたちは長ソテ）。

JICAで研修に来ていた友人たちとも逢えて、ラツキーでした。南北問題もしつかり見てきました。

本年も保養里親運動に、皆さんのご協力をお願い申し上げます。

（札幌 高橋芳恵）

◆斎藤さんの昨年の行動力には頭が下がります。なんとかなる年にしたいですね。母も元気で、今年は句集をつくりたいとはりきっています。

（立川 田中幹子）

◆私のほう、あいかわらず雑用係をしておりまして、学内・学外のこと追われているのです。昨年はミネルヴァ

書房から「生徒指導」を出版しました。今年は「特別活動論」を出す予定です。

（呉 倉田侃司）

◆変化の激しい、方向の不明な世界全体の中で、日々の日常に追われているうちに、時間だけが過ぎていく……。

日本語を教えることを通して、中国や韓国が身近になりつつも、様々な問題をはらんでいて、重い。

（京都 石川美智子）

◆「お母さん、まるで天の神様になったみたいだね」。昨年七月に二番目の子どもを出産。出勤再開を前に、遊園地へ。観覧車でテツペンまで来たとき、お兄ちゃんはどう歓声をあげました。「神様気分」は束の間。忙しい毎日です。

（東京 小林わかば）

◆新春を迎える度に、年賀状を出すことの是非になやんでまいりましたが、生まれ年と命名の由縁の干支（癸酉）が還った今年を期に、近況報告に徹す

ることにしました。

昨年七月初旬より思いがけない血糖値の増加・視力減退とともに急激な体重減少に見舞われ、きんさん・ぎんさんがいかに活躍しようと所詮我々には真似できないことと諦めたためでもあります。

禍福はあざなう縄のごとし、との例えのとおり、家族たちにも試練の多い一年でした。長男夫婦は覆水を盆に返す気なしの別居に踏み切り、両親がなんとか持ちこたえた（共働）家庭の失敗例に。次男は年越しの眼病で結局左眼の水晶体と大型二重免許を失いました。こちらは妻と生活設計に仲良く奮闘、昨年から、八王子のSSの開店準備に追われています。まだ居候の娘はほんの少々料理への関心増加。女房の減酒で思うようにワインが飲めない夫も、腰痛以外は元気です。

（東京 碧海西葵）

◆昨年は、仕事と著述活動に追われた一年でした。8月に梨の木舎から「ハインドブック戦後補償」を、12月には大月書店から「写真図説・日本の侵略」を刊行しました。

香港軍票や香港軍政史を担当させていただきましたが、未開拓の分野で手のかかった本だけにいろいろな思い出や愛着があります。多くの読者にむかえられるように、お近くの図書館や研究室にリクエストしていただければありがたい存じます。

(横浜 和仁廉夫)

◆私は鈴木喜久子代議士と共に、一月三日より七日までタイ・カンボジアへ、PKO部隊の視察のため、出かけます。このご報告は、後日必ずさせていただきますのでご期待下さい。

(東京 中山一郎)

◆今年は3月13日から三週間くらいアメリカ合衆国へ行つて、見聞を広め、

休息をとつてこようと思っています。

(東京 福島瑞穂)

◆二年前から大学設置基準が改正ということから、大学内は嵐のよう。生産的な混沌と変動ならば嬉しいのですが、自己利害の追求に終始する嵐のただ中で、「去るも地獄、残るも地獄」の悲哀を味わっています。なぜこのような変動がマスコミでほとんどとりあげられないのか、ふしぎですが。

(取手 大久保伸子)

◆先日は二十周年のすばらしい会に参加させていただき、皆さまにお目にかかれて本当にうれしゅうございました。

(東京 新田久子)

◆「うないフェス」(ラジオ沖縄)の担当を卒業し、新しいセクション(営業部)で新境地を開拓中です。

いよいよ「結の家」がスタートします。

(那覇 源 啓美)

◆本の輪を拡げるため努力し、二十冊

も残り少なくなりました。鈴木健二氏にも差し上げました講演会で。翌日付けの礼状が熊本から届きました。主人の先輩なので勇気を出しました。今年もがんばります。

(茨城 対馬智子)

◆今までと全く同じ仕事で同じように時間に追われています(NHKの時短の目標が二三〇時間とのこと)。

(東京 梶谷典子)

◆私こと、生を享けて七十年、大学もこの三月末で定年、人生のひとくぎりとなります。

今までずっと思い続けてきたことですが、考えているだけでは、世の中に願っていること何も変わりませんでした。具体的な行動にあらわれなければ、ことはサロンの遊びに過ぎません。生の目標を百歳とすれば、このあとの三十年は、考えていることを行動で表せるような生活をしてみたいと思

います。そのためではないのですが、生活をシンプルにするため、新年のあいさつなど欠礼することがあるかもしれません、お許し下さい。

(日野 工藤英三)

◆昨年三月、四十四年間の勤めから引退しました。神様の御恵みと皆様方に導かれて、いま自宅で自費出版のお手伝い、コンピュータ教材の編集などをしております。

(武蔵野 富岡正敏)

◆昨年は〈あごろ〉の熱気に直にふれることができて、いまでも心おどらせています。『日本女性史』の編集を藤原書店に申し込まれて、福田光子さんが「近世」、私が「古代」をやることになりました、〈あごろ九州〉を検討グループといたしました。

(福岡 河野信子)

◆私事で恐縮ですが、昨年11月の異動で学芸部長（毎日新聞社）を発令さ

れました。

長い新聞記者生活を、社会・政治といった分野をホームグラウンドとして過ごしてきた小生にとつて、学芸部が担当する文化・芸能といった方面はほとんど未知の分野です。また89年2月からは編集委員として気ままな勤務をしてみましたので、ラインの仕事に戸惑つております。

(東京 田中良太)

◆いま地域で、フォーラム、女性懇談会の委員で、企画に参加しています。マイペースで仕事をしています。

(府中 関和子)

◆静と動をダイナミックにくりかえしながら、この一年も過ぎていく……。アツハツハア (岡山 林順子)

◆昨年も弘前学院大学の大学祭や訪問伝道全国大会等で証させていただきました。そして在日大韓教会との宣教協力委員長や障害者の会の事務局長は、

引き続きライフワークとして仕えさせていただきます。

(岡山 難波幸矢)

◆去る十一月、私が二十五年間育てた三鷹木曜会合唱団が、久しぶりに私の指揮で第22回邦語メサイアを演奏しました。私が手塩にかけた合唱団で、私が常任指揮者でしたので、合唱は会心の出来でした。しかし私は前日まで約二十日間うつ状態になり、抗うつ剤の世話にもなりましたが、家内のひとことがきっかけで、演奏会当日は治っていました。

私は相変わらず、大変なお産にぶつかる臨床の第一線にいますので、気苦労はたえません。長年の経験が今こそ生きるのだと思い、多くの開業医がお産をやめたのに、反抗精神をもやしてがんばっています。

また、今まで三年つづけた立教大学社会学部の医学概論を、一年の空白

ののち再びたのまれました。責任の重い仕事で大変ですが引き受けました。

(三鷹 斎藤信彦)

◆92年は、「らくだ式学習塾―スペースMs―」を鳥取に開設しました。三月～五月は「Ms ネットワーク 講座―ニュースクール講座 in 鳥取」を開き、中澤さん(福祉)・竹居さん(整体)・和田さん(寄宿塾)を招きました。

八月には、中澤・川口・平井さんを招いて、ニュースクール ネットワーク シンポジウム―「福祉・農・教育根底に流れるもの」を開催。

その他、平井さん(セルフラーニング 研究所長)の講演会を計四回開催するなど、実りの多い年でした。生徒数も六十名を超え、皆様のご協力に感謝するとともに、新しい年への期待にワクワクしています。

(鳥取 芦谷岸本)美鈴)

◆月に一回の「東京未来塾」の仕事

が楽しい限りです。

(大阪狭山 中津燎子)

◆青少年課長として、今、がんばっております。

(東京 松田季美子)

◆夫孝絵は今年デンマークで勉強し、南アフリカで仕事をする予定です。

(福生 二口春代)

◆あきれるようなペースで生活しております。ご活躍、お祈りいたします。

(東京 庄司洋子)

◆「へあこら」のますますの御発展をお祈りいたします。

(東京 井上輝子)

◆ルームシグマは三回目の新年を迎えました。意識調査・世論調査を主軸に啓発冊子・資料の制作、行動計画策定に関わるコンサルタント等、自治体の女性政策・労働政策を中心に仕事の分野は高齢者や福祉にも拡がっています。スタッフも着実に力をつけております。研究室の活動も新たなステ

ップに踏み出します。

(大阪 金谷千慧子)

◆編集の手伝いを始めました。こんな仕事に就けるのも「へあこら」のおかげです。

(京都 中山紀代子)

◆昨年四月よりマネジャー(職管理職)に就き、短いながらも、仕事も軌道に乗ってきました。

今年は政治にも何やら新しい動きがあるのではと期待がふくらみます。

(東京 北村三和子)

◆二十周年記念の会に参加して、巨大な精神力にもはや感動、斎藤さんの真髓が伝わってくるようで、元気が出ました。

「へあこら山口」を作りたいですね。

(山口 斎藤貞子)

◆昨年4月、次男とマンション暮らしを始め、ただ今経済的自立をめざして悪戦苦闘中です。

(名古屋 長谷川友子)

◆半田さんが「ウイ」を終えられて、なんだか「あこら」が以前のように大きく見えてきました。

職場での立場上、家庭科教科書を中心に家族政策研究を進めてきましたが、今年は夫婦別姓の調査を仲間たちとやったり、自由な活動が増えそうです。

(水戸 酒井はるみ)

◆自己変革の年にしたいものです。

(岡山 市場恵子)

◆このところ、PTAや父母会で忙しく、新宿へ行つてもとんぼ返りです。皆さまお体だけはおだいじに。

(田無 古賀節子)

◆昨年、四十二歳で一児を恵まれました。現在、腕と足にサロンパスを貼ってがんばっています。

(東京 佐貫葉子)

◆東京にいたころ、子どもを連れてあつちこつち出向いていたのが、今となつてはウソのようです。年のせいなん

でしょう。か。いやいや、そんなことはない。斎藤さんも桑原さんも、私よりずつと年上なのにがんばっておられるぞ、と思いつつ……。

今年は、少しはよい年になりますように。

(広島 池田和子)

◆相変わらずあわただしく過ごしています。最近の世相を見ると、私たちの学生時代には、まだ国際政治に「志」があつた、という気がしますね。

(横浜 井上佑子)

◆昨年、85歳の母が脳梗塞で倒れ、ほとんど植物人間の状態になつて退院してまいりました。家には93歳のかかなり体の不自由な父も居まして、二人の介護と世話の合間にその他の仕事をこなすという生活が続いております。

私たち夫婦も揃つて「高齢者」の間入りをしましたが、どうやら今のところ健康です。退職後に自分たちの手で両親の介護ができるというのは、む

しろ幸せというべきかもしれません。しかしこの三か月で、高齢者福祉が私たちにとつて、より切実で身近な問題になったことも確かです。

お互いに安心してよい老後が送れるような世の中に、早くしたいものだと思います。

(岐阜 富田栄)

◆地球のあちこちが激動の昨年、私もあわただしく、しかし変わりばえのないまま一九九三年を迎えました。

いつまでも期待と夢と好奇心を持つていたいものです。

いい年になりますように。

(名古屋 奥村和子)

◆心身のお力にご信頼しております。広く深く重ねてこられ、これからも続けられるお仕事、そのお力になつていと存じますが、それがおからだを酷使することもあるのでは、とご案じております。

(東京 山岸汐子)

◆「癌になったから、ますますガンガンやります」なんて、さすがにスゴイご気力ですね。ご健闘を祈り上げます。

(東京 山口雅子)

◆ごぶさたしておりますが、「あこら」を読んで、いつもお逢いしているような気になっております。

(東京 加藤田カツ子)

◆今年も、パリ分室共々お引立てをお願い申し上げます。

飛幡祐規(たかはたゆうき)の本

・著書「ふだん着のパリ案内」91年
・訳書「フランス六人組」ユラール・

ヴィタール著 89年

「五百年後のコロンブス」エド

ウィン・ブレネル著 92年

(いずれも晶文社刊)

(東京 田代信子)

◆昨年は「イスラムの女」が出版できて、ほんとうにホッとしました。こち

らの力不足ゆえにいろいろご面倒をおかけしましたが、これにこりずに、今後ともよろしくお願いいたします。

(三鷹 寺澤恵美子)

◆同居生活にピリオドを打って、増田と姓を変えました。今年は新しい仕事を始めたいと思っています。

(東京 小網愛子)

◆二十周年の会での斎藤さんのお話には、思わず涙ができました。子どもも出来て、あまり新宿にうかがえなくなりましたが、どうぞお元気で「あこら」を続けてくださいね。

(市川 横山れい子)

◆月刊「あこら」、一七九号が来ません。一七八号「PKOの背後にあるもの」、とても勉強になり、次号もPKOに関するものが編集されているだろう……、どういう内容のものが来るだろうと、首を長くして待つておりましたが、先日一八〇号がまりました。諦

めようか、と迷いましたが、やつぱり見たいし、すばらしい本なので、どうしても欲しいと思います。

私は、広島県に住んでおり、国際貢献「億ドルと、自衛隊海外派兵差止め裁判」の訴訟団の一員として出廷し、がんばっておりますが、十分な審理が行われそうにありません。「あこら」は、思考を明確にしてみられ、私にとつては大切な本です。

(広島 岡田黎子)

〔会費について提案〕

◆「あこら」がたいへん苦しい財政にあるとのこと、心を痛めております。私は会費を思い切つて二万円ぐらいにしてはどうかと考えております。

自分のキャリアに「あこら」の情報が必要としている人がかなりいるのではありませんか。その人たちは他の運

動にもかかわっておられるでしょうか、カンパとなると、なかなか出費しにくいではありませんか。ですから、会費の値上げがこたえる人たちのために、自己申告制で会費を半分に減額する制度を設けては。何年かして余裕が出来た時点で普通の会費に戻つてもらうのです。

また、会費やカンパを送金した際、領収書と一緒に振込用紙を同封するほうがよいと思います。私はボーナス時に「へあこら」のほかに数件の運動に振込みますが、常に手もとに振込用紙がないのは「へあこら」だけです。

それにつけても、情報にお金を出すということとは、相当しんどいことです。ね。どうしても、食べ物に困っている人々のほうに少しでも多くという気持ちになつてしまいます。だから「へあこら」の人たちの大変さがよくわかります。

財政難で「へあこら」がつぶれるようなことだけは、どうしても避けなくてはなりません。それでなくても女性に必要な情報誌はほとんどない状況ですから。ほんの少しですが、カンパを同封させていただきます。

事務局の皆さま、頑張りすぎて健康を害することのないように、くれぐれもおからだを大切に。

(大阪 小出美穂)

お出かけください

● 1月27日(木) 6:30—8:30

下村満子さんと語る夕べ

● 2月12日(土) 4:00—10:00

あこら企画会議

どちらもスペースあこらで。

申し込み03・3354・3941
FAX 33549014あこら

〔編集後記〕

昨年のお年賀状を載せたものか、さんざん迷いましたが、年越し年賀状も「へあこら」らしいと勝手な理屈をつけて掲載させて頂きました。93年の、日本の市民たちの想いが伝わる貴重な記録と思われそうです。

今年は、去年とはまたガラリと変わった(でも芯になるものは一貫した)お年賀状が届きました。とても勇気づけられる貴重なお便りばかりですので、三月号にでも掲載させて頂きたいと思います。

二月号は特集「新聞切抜きに見る女の16年Ⅳ」です。年末年始にたくさん会費とカンパが振込まれ、お陰様で続刊できそうです。ありがとうございます。

(事務局一同)

あごら 192号 ●発行 1994年 1月10日

●編集 あごら編集部

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区大京町20-7 第一伊藤ビル

●03-3354-3941

●振替東京0-5264

●発行人 あごら企画会議 定価886円(860円+26円)

この ひろい宇宙に
たった一つの地球

その 大きな地球に
たった一人のわたし

そして あなた

かけがえのない地球

かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあごら

人と人の出会うひろば

へあごら

人と人の共に生きるひろば

定価886円 (860円+税26円)

女による女の BOC 出版部

ISBN4-89306-016-3 C0036 P886E